



家康公と三河武士たち

日本人の心の奥底に脈々と息づく誇りは、「サムライ」の心

「新・家康公検定」2019

副読本



編集 / おかざき塾 発行 / 公益財団法人徳川記念財団・岡崎商工会議所

2019年度

新・家康公検定

わがふるさとは、三河
家康公と三河武士たち

「家康が宝とするもの」

関白（秀吉）はある時、君（家康）をはじめ、毛利、宇喜多などの諸大名を集め、「私が宝とするものは虚堂の墨蹟や粟田口の太刀である。」などと数え上げ、「さて皆が大切に思っている宝は何か」と聞かれた。毛利、宇喜多らは所持している品々を申し上げたが、君ひとは黙っていらっしやっただので、関白が「徳川殿は何の宝をお持ちか」と尋ねた。君は「私にご存知のとおり三河の片田舎に生まれましたので、何も珍しい書画や調度品を貯えておりません。しかしながら、私のためには水火の中に入っても命を惜しまない者が五〇〇騎ほどおります。これこそ家康の身において第一の宝と思っています」とおっしゃった。関白はいささか取じらった様子で、「そのような宝を私もほしいものだ」と言われた。

「現代語訳 徳川実紀 家康公伝」より

はじめに

「新・家康公検定」。令和元年に学びます。

今年のテーマは「家康公と三河武士たち」です。

長く続いた戦乱の世に終止符を打ち、新たな時代を築き上げたのは徳川家康公と三河武士たちでした。

しかし、この偉業は一朝一夕にできたものではありません。

三河はわが国の東西を結ぶ要衝の地です。古事記や日本書紀の時代から数多くの人物が往来してきました。長い時間をかけてこの地に三河武士のルーツが形づくられたのです。

松平一族も家康公が誕生するまで八代にわたり様々な試練の中で実力を蓄え、三河武士との絆を強めました。

こうした背景をもとに生まれてきたのが徳川家康公です。

波乱に満ちた人生の中で、一国のリーダーに相応しい力を備えました。深い洞察力と忍耐強さ。信仰心と人の心を掴む力。そして果敢な行動力。生死を顧みずに忠義を尽くす三河武士たちと共に時代を動かしたのです。

家康公を中心に戦乱の世から江戸にかけての時代を学ぶことには大きな意義があります。人間や政治、社会のあり方についての理解が格段に深まるからです。今回の検定がその一助になれば幸いです。

目次

—はじめに— 1

I 三河武士たちのルーツ

- 1 足利氏の三河進出 4
- 2 南北朝の争乱と西三河 5
- 3 三河に移ってきた武士たち 6
- 4 三河国動乱と松平氏の登場 8
- コラム『出世の瑞兆“兎のお吸物”』 . . . 9

II 松平一族と家臣たち

- ・主な三河譜代の家臣たち 10
- 1 初代 松平親氏、二代松平泰親 11
- 2 三代 松平信光 12
- 3 四代 松平親忠 13
- 4 五代 松平長忠（長親） 14
- 5 六代 松平信忠 15
- 6 七代 松平清康 16
- コラム『岡崎開市』 17
- 7 八代 松平広忠 18

III 家康公の時代、徳川創業のころ

- ・序 20
- 1 三河一向一揆（二分した家臣団） 21
- 2 東三河の国人衆（三河統一と新たな家臣たち） . 22
- 3 旗本先手役（三河武士の立役者たち） 23

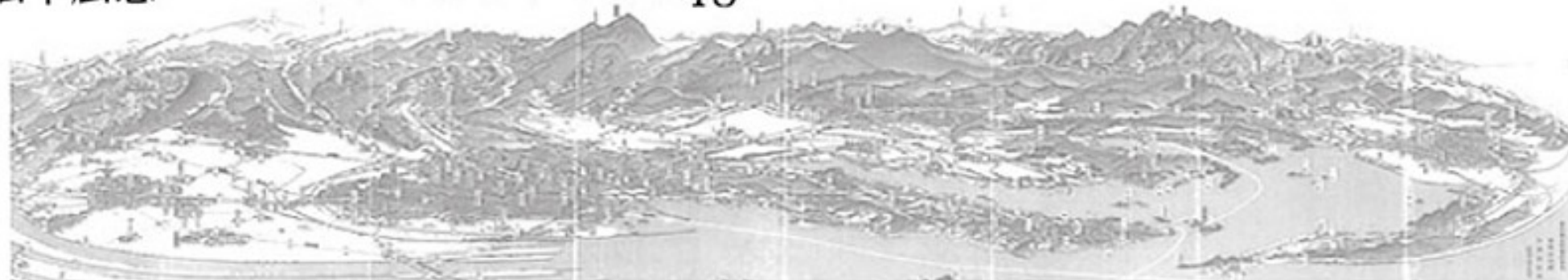
IV 三河武士ものがたり

- ・序 24
- 1 家康公を、支えてきた三河武士 25
- 2 家康公に、戻ってきた三河武士 32
- 3 家康公に、新たに加わった三河武士 36
- 4 ここにも三河武士 38

参考資料

- 家康公の宝もの、三河武士たち一覧 40
- 三河武士たちが治めたまち 137 58
- 家康公を取り巻く家系図 61
- 年表 家康公の生涯 62

—おわりに— 70



吉田初三郎画
三河俯瞰図より

1. 三河武士たちのルーツ

1 足利氏の三河進出

承久3年(1221)に京都で勃発した「承久の乱」は、後鳥羽上皇が中心となり、鎌倉の北条氏による武士の政権から実権を院(朝廷側)に奪い返そうとしたものでした。執権(将軍の代わりに政治を行う役)北条義時は19万とも伝わる大軍で京都を攻め、この戦いに勝利すると、乱に関わった院や公家、武家の荘園や領地3,000ヶ所ほどを没収し、乱鎮圧に功績のあった幕府の御家人を新たに地頭職に任じるとともに、朝廷の監視や西国の統制を行う六波羅探題を京都に設置します。

この乱鎮圧の恩賞として、鎌倉(東国)と京都(西国)の中間に位置する東西交通の要衝であり、源頼朝ゆかりの重要拠点である三河国を与えられたのが、北条氏の信頼が厚く、側近(執事)でもあった足利義氏です。

三河守護となった義氏は、併せて三河国内の額田郡、碧海荘、吉良荘の地頭職にも任じられ、額田郡に所領地を得たほかに、もともと貴族たちの所有していた荘園を与えられ、一族や被官(家臣)を矢作川流域のこの地に配置することでその支配力を強めたのです。西三河を武士たちが支配する原風景です。



足利義氏像(鏡阿寺蔵/足利市)

<矢作川流域に配置された主な足利一門>
地名を苗字とし、●細川氏 ●仁木(にき)氏
●吉良(きら)氏 ●一色(いっしき)氏
●今川氏などを名乗る。

2 南北朝の争乱と西三河

元弘3年(1333)、後醍醐天皇の呼びかけに応じ、反鎌倉幕府勢力に加わった足利尊氏は、京都の六波羅探題を攻めるため、わずかな兵で京都に向かいました。その途中、「矢作の足利館」に西三河の一門が集まり、数万の軍勢に膨れ上がったと伝えられています。こうして鎌倉政権を倒した尊氏でしたが、建武2年(1335)の北条氏の反乱(中先代の乱)を鎮圧した後は、帰京命令を無視して鎌倉に留まりました。これに対して後醍醐天皇は、尊氏を討つため官軍として新田義貞を出陣させたのです。

足利方は西三河の一門が集結、両軍が対決したのが「矢作川の戦い」です。足利方は矢作川東岸に陣を張る一方、新田軍は矢作川西岸に陣を張りました。この戦いでは足利方が敗退します。矢作川西岸にある矢作神社には、新田義貞が戦勝祈願をした際に、これに応じて唸ったという「うなり石」が今も祀られています。

その後、勢力を盛り返した尊氏は一旦京都に入りますが、後醍醐天皇方の諸将により京都を追われ、九州まで落ち延びます。この時、九州から尊氏に従った氏族に本多氏がいいます。尊氏は再び京都を目指し、湊川(神戸市)で新田義貞や楠正成を破ると政権を樹立、室町幕府を開きました。一方、後醍醐天皇は吉野に脱出したため、「京都の北朝・吉野の南朝」と呼ばれる南北朝時代が始まったのです。



「うなり石」矢作神社(岡崎市矢作町)

3 三河に移ってきた武士たち

全国を二分する南北朝争乱の中で、武士団の大移動がありました。三河武士たちのルーツとも考えられる武士団の移動と、そのルーツを追ってみます。

【鈴木氏】

「佐藤」と並んで全国にその名字が最も多いとされる「鈴木」氏ですが、家康公に仕えた三河国人鈴木氏のルーツは、12世紀頃に熊野から紀伊国藤白（現在の和歌山県海南市）に移り住んで王子社（現在の藤白神社一熊野詣の最重要神社）の神官を代々務めた家です。

吉野の南朝が衰退すると三河国矢並（豊田市矢並町）に移り住んだと伝えられます。室町時代には加茂郡一帯（現在の豊田市の大部分とみよし市）に勢力を広げますが、やがて家康公に従うようになります。寺部（豊田市寺部町）の鈴木氏は松平元康（家康公）17歳の初陣で攻められ、桶狭間の合戦後には家康公に服属します。

【鳥居氏】

鳥居氏のルーツも紀伊国熊野権現の神職の家柄と伝えられます。鳥居氏の祖である熊野新宮第十九代別当は平清盛から平氏の姓を賜り、通称「鳥居法眼」と呼ばれていました。熊野別当とは、9世紀から14世紀前半にかけて、熊野三山「熊野本宮大社」「熊野速玉大社」「熊野那智大社」の統括にあたった役職のことです。

承久の乱以降に三河国渡村（岡崎市渡町）に移り、土着して渡里氏を称したと伝わります。南北朝の争乱期には巨新右衛門が新田義貞に従っていたという伝承も残され、古

くからこの地に土着していた様子がうかがえます。

【鶴殿氏】

鶴殿氏は今川氏の重臣として有名ですが、前掲の鈴木氏、鳥居氏と同じく紀伊熊野との関わりが見られ、その先祖は熊野三山社僧であり別当職にあったと伝わります。

後に新宮鶴殿村に住したことから、鶴殿姓を名乗るようになりました。南北朝騒乱のころ、熊野別当家が代々有していた三河国宝飯郡西郡（蒲郡市）の荘園に移ると、上ノ郷家と下ノ郷家に分かれました。上ノ郷の鶴殿家は今川氏に仕え、今川義元と縁戚の関係を結ぶことで、重臣としての待遇を受けるようになりました。桶狭間の戦いで、家康公が兵糧入れを行った大高城を守備していたのが、鶴殿長照（上ノ郷家）です。

【宇都宮氏一大久保氏】

三河譜代の中でも「三河物語」を記したことで有名な大久保彦左衛門忠教ら、大久保一族の先祖は、下野国（栃木県）住人宇都宮朝綱の子孫と伝わっています。朝綱九代の孫泰藤は、南北朝の争乱では新田義貞に従って戦っていましたが、義貞戦死の後に、その首を持って越前から、三河国上和田郷（岡崎市上和田町）に移り住んだと伝わります。

岡崎市にはその時の義貞の首を祀る首塚が、宮地町の犬頭神社に、また泰藤が菩提寺と定めた妙国寺にその墓、石碑が建立されています。後に姓を宇津と改め、その子孫である忠茂が松平七代清康に仕え、大久保と名乗ったとされています。



犬頭神社（岡崎市宮地町）

4 三河国動乱と松平氏の登場

足利幕府初期（南北朝時代前半）の三河守護には、足利家執事であった高師直の一族が任命されていましたが、尊氏の弟直義との対立「観応の擾乱」（1349~1352）により三河国内も分裂、南朝方の粟生氏（岡崎市秦梨町）ら国人衆は南朝に付いた直義側に従っています。

高一族滅亡（1351）後、尊氏の信任厚い仁木氏が三河守護になりますが、尊氏没後、仁木氏も没落し、新田大島氏が就任（1360）、その後、足利一門の一色氏が4代60年にわたり統治しました（1379～1440）。

三河最後の守護、細川成之の時代の寛正6年（1465）、元室町幕府奉公衆・元足利將軍家被官衆とされる武士の一団が額田郡一円で幕府に対し反乱を起こしました。これが「額田郡一揆」と呼ばれているものです。

戦いは井ノ口砦（岡崎市井ノ口町）に立てこもった一揆側と、幕府の命を受けた松平氏・戸田氏などの鎮圧軍の激戦となり、結果、一揆側は敗北。恩賞により松平氏は東西三河、戸田氏は東三河（田原）において新たな所領を得、

その後の発展のきっかけになったのです。特に松平氏は深溝（額田郡幸田町）や、宝飯郡の形原・竹谷・五井（蒲郡市）、長沢（豊川市）などを得たことで一族が分立発展することになりました。一揆側には、後に譜代家臣となる高力氏の名前が見られます。



三河に移ってきた武士たち【林家】

《徳川家のお正月》 出世の瑞兆“兎のお吸物”

江戸時代、徳川幕府では正月元旦、年賀に訪れる家臣たちに「兎の吸物」を振舞う年中行事があり、將軍から毎年一番に頂くのが林家の当主でした。これにはこんな逸話が残ります。

家康公のご先祖、世良田有親・親氏父子が戦に敗れ諸国放浪の途次、信州林郷に蟄居する旧知の小笠原光政を訪ねました。ご馳走するものがない光政は12月29日、雪中で一羽の兎を射止め、吸物に仕立て年賀の膳に供しました。

後に松平家の当主として立身した親氏は「あの兎が瑞兆であった」と光政に林の姓を与え、侍大将として三河に呼び寄せました。以来、毎年元旦の賀宴には、松平一族よりもまず最初に光政に兎の吸物と酒盃を与えるのが常となり、林家も毎年12月29日に兎狩りをし、献上するのが恒例となりました。

この故事に倣い、家康公を祀る龍城神社では、例年、元旦午前0時より初詣のみなさんに兎汁が振舞われています。



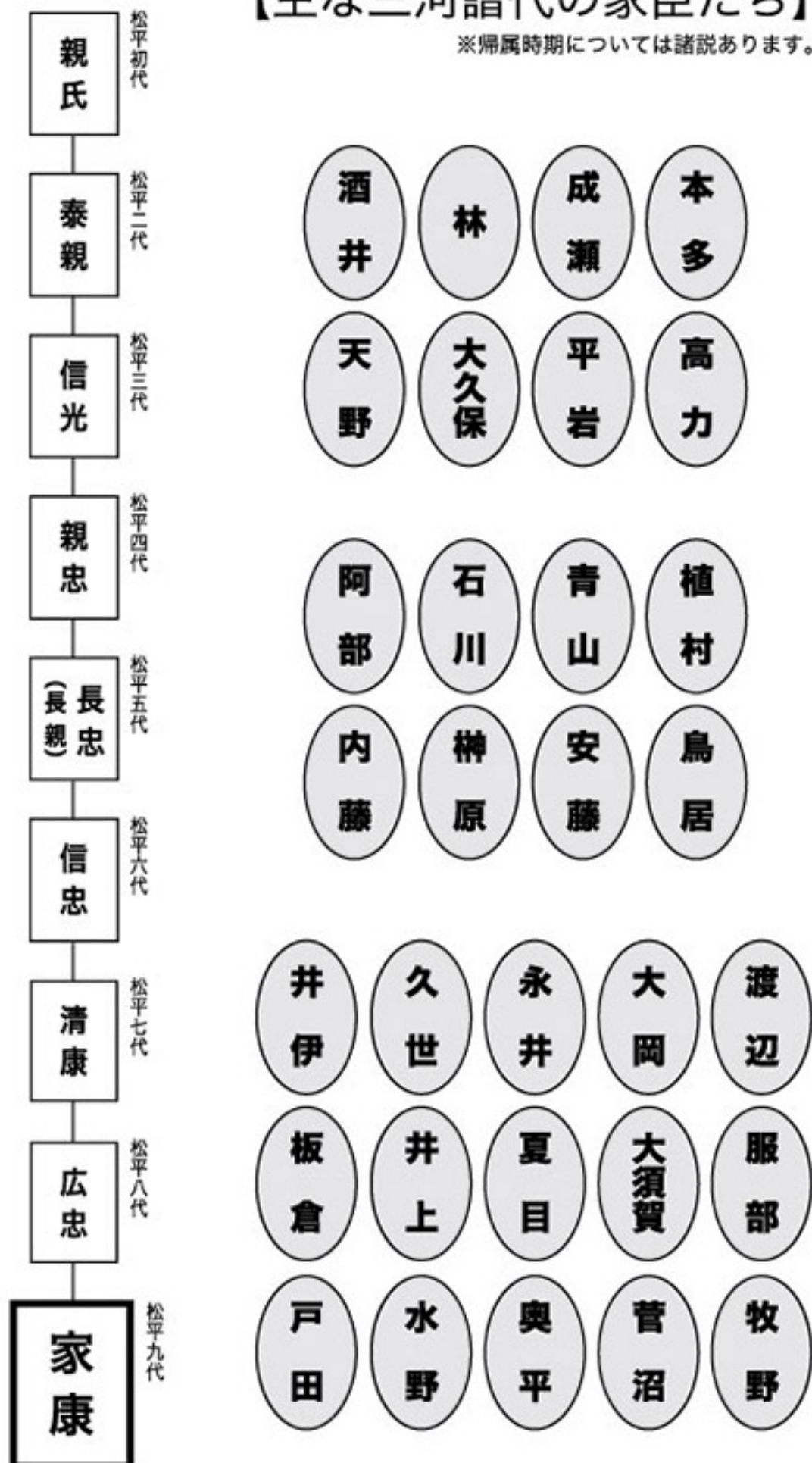
「林光政 雪中に兎を狩」図
（『善光寺道名所図会』挿絵）

※林氏は家臣として最古参の譜代と考えられ、子孫は上総国請西藩主。幕末の戊辰戦争では藩主自ら脱藩して最後まで徹底抗戦した林忠宗。昭和16年まで生き、最後の大名と呼ばれました。

II. 松平一族と家臣たち

【主な三河譜代の家臣たち】

※帰属時期については諸説あります。



《岩津譜代》

《安城譜代》

《岡崎譜代》

1 初代 松平親氏、二代 松平泰親

松平初代 親氏から三代信光にかけ領地が拡大する過程で、後世、家康公を支えることになる家臣団の基礎が成立しました。初代 親氏が三河国加茂郡松平郷（豊田市松平町）の松平太郎左衛門家に養子入りする以前は、時宗の僧、または遍歴する職人であったのではないかと考えられています。親氏は道の造成や寺社の勧請、維持・修造への寄進、村を守るため松平城の築城・維持などの有徳に努め、松平郷における社会的身分や地位を高めました。これにより、親氏は加茂郡や南に接する額田郡への影響力を強めてゆきます。この親氏の時代に家臣となったのが、酒井広親（酒井忠次祖）、林藤助光政（林忠政祖）、成瀬基直（成瀬正成祖）と言われています。「三河物語」（大久保彦左衛門忠教著）などには武力による征服伝承がありますが、実際は有徳活動による支配地拡大であったので、これらの家臣団は、普請・造作、また対人との交渉に長けており、その能力を基に松平家を支えたのでしょう。

兄 親氏の跡を継いだ松平泰親は、引き続き有徳活動に努めます。泰親の業績は、矢作川河畔で山間部と岡崎平野を結ぶ要地 岩津城への進出などが挙げられます。応永20年代後半（1420頃）、岩津へ進出した泰親は、室町幕府政所執事の伊勢氏の被官となり、地域領主へと転換します。この泰親時代に家臣となったのが本多諸家の祖 本多助時などと言われています。室町幕府の奉公衆でもあった本多一族が家臣となる事で、松平家の周囲に与える影響力は増したものと考えられます。

2 三代 松平信光^{のぶみつ}

初代 親氏の二男であった信光は、泰親より領地としての岩津^{ゆず}を譲り受けました。泰親時代に伊勢氏被官として領主化した松平家は、信光の時代において、領地を大きく拡大させます。まず大給^{おぎゅう}（豊田市大内町）や保久^{ほっきゅう}（岡崎市保久町）を手に入れて、その後、伊勢氏被官として額田郡一揆^{ぬかたごおりいっさ}の鎮圧に武力を用いて^{じんりよく}尽力、深溝^{ふこうず}を得て額田郡南部に影響力を強めるとともに、宝飯郡にも所領^{ほい}を得、形原、竹谷、五井、長沢などに一族を分立させて支配権を拡大したのです。また応仁・文明の乱の西軍であった一色氏方の安城城を攻め落として息子の親忠を城主とし、さらに守護代であった西郷氏の居城 岡崎城を攻め、息子の光重^{みつしげ}を西郷氏の婿養子^{むこようし}に入れて岡崎城を手に入れます。これにより碧海郡や額田郡南部への支配を強めました。

信光は浄土宗の信光明寺、妙心寺（現、円福寺）、及び曹洞宗の萬松寺を建立します。特に信光明寺や妙心寺は、京都に滞在していた信光の長男 親長の働き掛けもあり、天皇の祈願所となりました。

さて、この時代に家臣となったのは、宇津氏（後の大久保氏）、平岩氏などです。泰親の頃までに家臣となった酒井・林・成瀬・本多とともに、信光の額田郡勢力拡大に尽力したのでしょう。彼等が、後に岩津譜代と呼ばれることとなります。



松平信光像（萬松寺蔵 / 岡崎市滝町）

3 四代 松平親忠^{ちかただ}

四代 親忠は三代 信光の子で、信光から安城城を譲り受け、安城松平の始祖となりました。安城に移る前は、額田郡一揆制圧の恩賞として与えられた鴨田・井ノ口辺り（ともに岡崎市北部）に館を構えています。

文明2年（1470）には一族の氏神として伊賀八幡宮を創建、文明7年（1475）には碧海郡宇禰部郷（豊田市畝部町）の福林寺住職・勢誉愚底を開山として、鴨田の親忠の領地内に一族の菩提寺として大樹寺を創建しました。

明応2年（1493）、碧海・加茂郡の国人衆が井田野に攻め入りますが、親忠はそれを撃退（明応井田野合戦）、この勝利を足掛かりにして、勢力を伸張してゆきました。

親忠は51歳のころに出家し、西忠と名乗っています。

安城松平家の基盤を固め、松平一族内での地位を高めたのが親忠といえるでしょう。

基本的に、親忠の安城進出から七代 清康が岡崎に進出するまでの間に松平氏に仕えた家を安城譜代と言ひ、松平家臣でも岩津譜代に次ぐ古参の家臣をさします。中でも阿部・石川・青山・植村・鳥居氏らが代表的な安城譜代と考えられています。

親忠の代に仕えた一族に石川氏があります。石川氏は碧海郡小川（安城市小川町）を本拠に本願寺（一向宗）門徒の在地武士を松平氏に仕えさせ安城松平氏の発展に貢献しました。子孫には家康公の許で重きを成した石川家成、数正^{かずまさ}がいます。



勢誉愚底像（大樹寺蔵 / 岡崎市鴨田町）

4 五代 松平長忠 (長親)

五代 長忠は安城松平家二代目で、四代 親忠の子にあたります。江戸時代の文献では長親と記されますが、現存する古文書では長忠という名乗りのみが確認されます。永正3年(1506)駿河守護の今川氏親と伊勢宗瑞(後の北条早雲)が三河に攻め入り、永正6年まで戦が続き、永正三河の乱。この合戦により岩津城は陥落し、惣領家筋にあたる岩津松平家は壊滅的な打撃を被りました。長忠自身も絶体絶命の危機に瀕しましたが、今川軍が兵を退いたため、長忠は難を逃れています。

また長忠は、永正三河の乱で大破した大樹寺の再建・修繕のため多くの土地を寄進したり、松平郷六所神社(豊田市坂上町)の再建を行っています。高月院(豊田市松平町)には土地を寄進するとともに、弟で京都知恩院25代住職であった超譽存牛を住職としました。このように長忠は、先祖伝来の地の寺社の復興・発展を援助することで、安城松平家の惣領としての立場を固めることに力を注ぎました。

永正三河の乱では、酒井氏・本多氏・大久保氏らとともに、青山氏も奮闘しました。青山氏は百々城(岡崎市百々町)を拠点に松平氏に仕えたとき、江戸時代には2家が篠山藩(兵庫県)6万石、郡上藩(岐阜県)4万8000石を領しました。東京青山の地名は、この青山氏の屋敷があったことに由来しています。



青山氏顕彰碑(百々城址/岡崎市百々町)

5 六代 松平信忠

六代 信忠は安城松平家三代目で、五代 長忠の子です。「三河物語」では、信忠は松平家当主として必要な武勇・情愛・慈悲のいずれも欠けており、そのため一族が分裂する原因をつくった、統率力に劣る人物であると評価しています。

しかし実際には、妙心寺・萬松寺(ともに岡崎市)などへの発給文書が残り、岩津松平家没落後の安城松平家の勢力拡大に努めていることもうかがえます。一方で、強引な性質の信忠に松平氏一族が反発したため、やむなく信忠は家督を子の清康に譲り、自らは大浜(碧南市)に隠退したと考えられます。

また江戸時代の書物では、信忠は神仏をないがしろにしたと記されています。しかしこれも、大浜の称名寺へ何度も寄進していることや、大樹寺に伝わる涅槃図に法名とともに剃髪した姿が描かれていることなどから、事実とは異なる可能性が指摘されています。「三河物語」は信忠の子の清康を英雄視する傾向があるため、事実と異なる、もしくは誇張されて記されているのかもしれませんが。

信忠の代に仕えた家臣には、内藤氏がいます。内藤家は代々、一向宗門徒で、清長、正成など弓の名手を輩出し、清長の子 家長は「無双の弓手」と称されました。また一向一揆では、一族が二分して争い、清長は一揆方に、その子 家長や甥の正成は家康方について奮戦しています。内藤家のうち幕末に大名であった家は6家あり、宗家は延岡藩主(宮崎県)として明治維新を迎えました。東京の新宿という地名は、高遠藩主内藤家の江戸屋敷があった内藤新宿から来ています。

6 七代 松平清康

家康公の祖父に当たる清康は、永正8年(1511)、松平宗家六代当主 信忠の嫡男として安城城に生まれました。大永3年(1523)に隠居の祖父 道闕(長忠)や一門衆が、一族との内紛が絶えない父 信忠を隠居させ、子である13歳の竹千代(清康)に家督を継がせました。

【岡崎進出】

清康は大永4年(1524)、岡崎松平家の重要拠点である山中城(岡崎市舞木町)を攻撃して西郷信貞(松平昌安)を降伏させ、次いで岡崎城を開け渡させ、本城を安城から岡崎に移転しました。

清康は信貞の居城であった旧岡崎城に入りますが、享禄3年(1530)には現在地の岡崎城に移転、城下町をつくり、統治体制を整備しました。また、松平氏の菩提寺 大樹寺の勅願寺化や修築・多宝塔の新築、奥州塩竈明神から勧請を受けての六所神社創建、龍海院(是ノ字寺)の創建等を行いました。

【三河統一】

清康は更に、東西に軍を進めて三河国統一を目指し勢力を広げます。享禄2年(1529)、小島城(西尾市)を攻め伊奈氏を従えました。その一方で、東三河にも進出し、三河牧野氏の今橋城(後の吉田城/豊橋市)を攻め落とし、戸田氏の田原城(田原市)を降伏させます。この間に北方の設楽郡「山家三方衆」の田峯城菅沼氏及び長篠城菅沼氏と亀山城(作手町)奥平氏、宝飯郡牛久保の牧野氏等の東

三河国人衆の多くが清康に服属、三河国統一を成し遂げたのです。

【守山崩れ】

三河統一の勢いに乗った清康は、天文4年(1535)12月、美濃国の斎藤道三と尾張国の織田信秀を攻めるため(諸説あり)、1万余りの大軍で尾張に進軍します。清康は織田信秀の弟・信光の守る守山城を攻めました。この守山の陣の最中、清康は突然、家臣の阿部正豊に斬られ殺されてしまいます。これを「守山崩れ」と呼んでいます。享年25歳、阿部正豊はその場で植村氏明によって討ち取られました。

II. 松平一族と家臣たち《コラム》

岡崎開市

山中城攻めで一番の手柄を立てた大久保忠茂には、清康より恩賞として岡崎の市場の「枅取」(主に税の徴収)の権利が与えられました。忠茂は商売の税を免除し、諸国から商人を集め、松平家の新たな城下町の発展を図りました。はたして岡崎城下には諸国の商人が集まり、大手門前には商人の町(後の連尺町)ができはじめます。このときを岡崎の商業の始まりと捉え、「岡崎の開市」と呼んでいます。

以来500年近くにわたり、岡崎商業発祥の地である連尺・康生・本町地区は、岡崎のみならず西三河の商業の中心地として発展してきました。



7 八代 松平^{ひろただ}広忠

守山崩れの時、嫡子^{ちやくし}の広忠はまだ10歳の子供でした。大叔父^{おおおじ}の桜井松平信定は「虚^{きよ}に乗りて」岡崎城横領^{おうりょう}を断行します。天文5年(1536)には松平宗家の所領^{ことごと うば}を悉く奪^{くわだ}取り、譜代の衆を従属させ、さらに広忠を殺害しようと企てるようになったと伝えられます。

清康を殺害した阿部正豊の父である阿部大蔵定吉^{おおくらさだよし}は、広忠を伴い岡崎城を出奔^{しゅっぽん}しました。定吉は吉良持広^{きらもちひろ}の庇護^{ひご}を得て伊勢国神戸^{かんべ}(鈴鹿市)まで逃れ置^{のが}われます。さらに庇護者であった吉良持広^{かきま}が死去すると、さらに三河へ再逃亡します。その後、岡崎帰参^{きさん}を今川義元^{きぎん}に取りなしてもらうため駿河へ渡^{するが}って翌年まで滞在しました。

天文6年(1537)義元の計らいで三河^{むろじょう}「牟呂城」(西尾市)に移されます。大久保忠茂の子 忠俊^{ただとし}をはじめ、広忠の帰城を望む譜代衆の働きもあり、叔父 松平信孝^{のぶたか}の協力を得て岡崎へ復帰^{ふこく}することができました。そして天文10年(1541)には、刈谷城主 水野忠政^{かみや}の娘^{おだい}(於大)と結婚、翌天文11年(1542)12月26日に家康公が岡崎城に誕生したのです。

この間、松平一門や家臣たちは尾張の織田派と駿河の今川派に分裂していたと考えられ、天文9年に織田信秀が安城城を攻め落とすと、広忠に離反^{りはん}する者たちも多く現れました。家康公生誕の年の夏にも、岡崎城の目と鼻の先で織田・今川による大きな戦いが行われました。第一次小豆坂^{あずさざか}の合

戦です。また、叔父の松平忠倫^{ただみち}や信孝も広忠から離反してしまいました。広忠は今川氏の支援を受けるため、竹千代を人質に差し出します。ところが途中、田原城主の戸田康光^{やすみつ}により尾張の織田氏に送られてしまったのです。広忠は様々な困難に直面したのですが、譜代家臣たちの支えもあり、天文18年(1549)には叔父の信孝を耳取^{みみとり}取^{なわて} (岡崎市明大寺町)の戦いで破りました。こうしてようやく松平党を統一することができたのです。しかし、その年の春、織田方の間者 岩松八弥^{かんじゃ いわまつはちや}に斬られ、24歳で死去してしまいます。岩松八弥は清康を刺した阿部正豊と同じく、植村新六郎氏明に討ち取られました。なお、広忠は病没^{びょうぼつ}という説もあります。



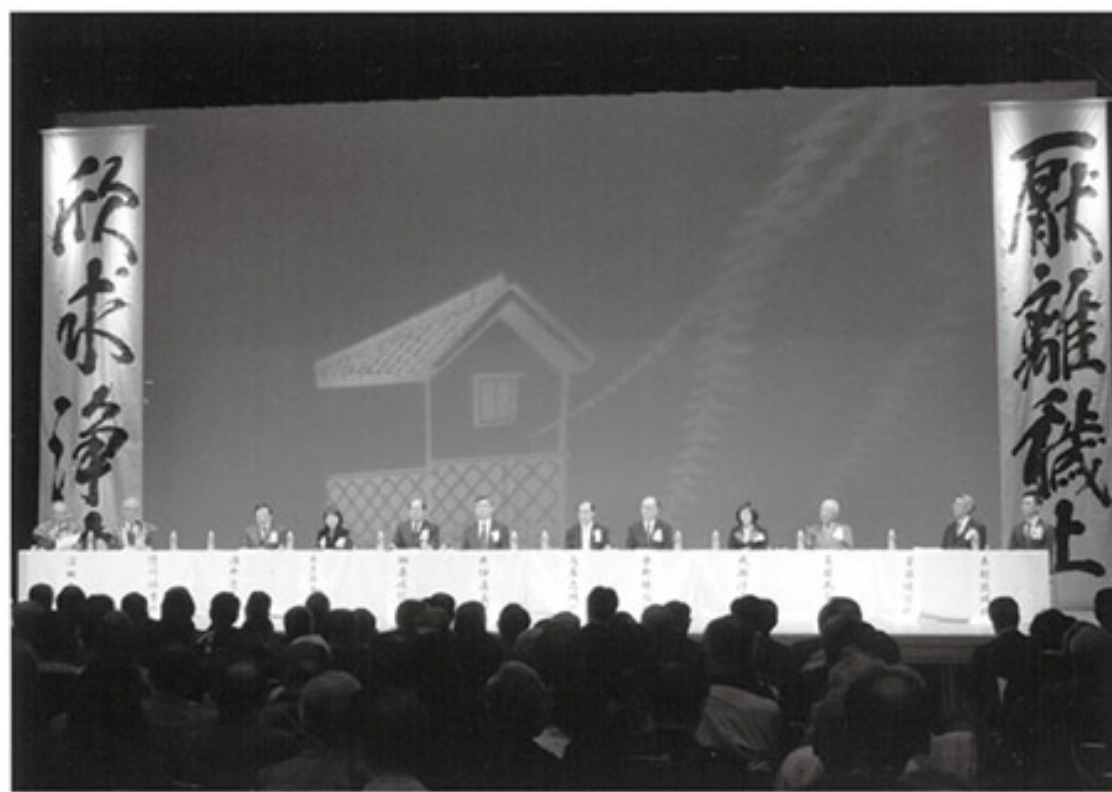
しょうおうじ
松應寺 (岡崎市松本町)

1560年(永禄3年)、桶狭間合戦の後に岡崎城へ入城した家康公は、父 広忠の菩提^{とじら}を弔うため、墓所の近くに寺を創建しました。かつて、人質時代の自分が松平家の繁栄を祈って父の墓の横に植えた小松が、青々と伸長しているのを見た家康公は「我が祈念^{おん}に應ずる松なり」といい、「松應寺」と名付けたと言われます。

III. 家康公の時代、徳川創業のころ

序

「おかえりなさい、ふるさと岡崎へ」
家康公顕彰400年記念シンポジウムが
平成27年11月1日に開催されました
「徳川創業期の家康公と家臣団」
徳川宗家十八代当主 徳川恒孝氏つねなりを中心に
三河武士たちの子孫がふるさとへ帰り 集い 語り
歴史に学びました
その家臣団が生まれてゆく大切な背景は
三河一向一揆
東三河の国人衆
旗本先手役



岡崎市竜美丘会館にて

III. 家康公の時代、徳川創業のころ

1 三河一向一揆いっこういっき〈二分した家臣団にぶん〉

桶狭間おけはざまの戦いの後、岡崎城さかんに帰還した家康公さつそくは早速、西三河へいていの平定を進め、翌年には東三河へ侵攻し三河統一に取りかかります。

その過程に起きたのが三河一向一揆でした。

守護不入しゅごふにゅうの特権（領主権力からの一種の独立権）を侵害しんがいされた本宗寺ほんしゅうじ（岡崎市福岡町）、本證寺ほんしょうじ（安城市野寺町）、勝鬘寺しょうまんじ（岡崎市針崎町）、上宮寺じょうぐうじ（岡崎市上佐々木町）などの三河本願寺教団と家康公が対立。一揆の蜂起ほうきにあたって、門徒である一部家臣団（本多正信ほんだただのぶ、夏目吉信なつめよしのぶ、蜂屋半之丞はちやはんのじょうなど）も信仰上の信念により家康公から離反りはんして教団側に付きました。

更に、家康公の三河統一に反感を持つ三河有力国人こくじん（上野城さかいただなお 酒井忠尚とうじょうじょうや東条城きらよしあき 吉良義昭など）や松平一族おおくさ（大草松平おおくさや桜井松平など）も一揆と連携して立ちあがりました。

この頃はまだ、松平氏は一枚岩ではなく個々の家が独立した領主で、家康公が絶対的な君主とはいえませんでした。

離反りはんする一族・家臣がいれば、忠誠ちゅうせいを誓う側もいます。

例えば野場城のばじょうにおいては、一揆方の夏目吉信と、家康公側の深溝松平家ふこうずはじめ、竹谷、形原、五井、藤井、福釜ふかまなどの松平家が対峙。家臣では、大久保忠員ただかず（忠世、忠佐らの父）を始めとした大久保一族、酒井忠次、本多忠勝、平岩親吉ひらいわちかよし、本多広孝ほんだひろたかなどが家康公に従いました。本多広孝のように息子の康重を人質として家康公に差し出し忠誠を誓った武将もいました。それぞれの信念に基づき戦ったこの戦いくさは、国内や家臣団を二分するも、この平定を機に家康公は家臣団を統制し、三河統一に向けて邁進まいしんすることになります。

2 東三河の国人衆こくじんしゅう〈三河統一と、新たな家臣たち〉

一向一揆を平定した家康公は、再び三河の統一に乗り出します。

家康公の進軍に応じ、二連木城主の戸田重貞とだしげさだ、奥三河に勢力を誇る奥平定能おくだいらさだよしらが家康公につき、一気にその勢力を拡大してゆきます。

永禄8年(1565)には、吉田・田原両城を、今川方の兵士助命を条件に開城させ、東三河をほぼ手中に収めました。家康公は、酒井忠次に吉田(豊橋市)と東三河の統轄とうかつを一任し、本多広孝を田原城に入れています。翌9年(1566)には牛久保城を守る牧野氏を帰順させ、同年朝廷により三河守かわのかみに任じられたことにより(同時に徳川に改姓)、名実ともに三河統一を成し遂げました。

この三河統一の過程で注目すべきは、今川方に付き抵抗した東三河の武士たちを、家康公は処断せず、逆に彼らの権益けんえきを認めたくて配下はいかに加えたことです。

牛久保の牧野氏ほか18人の東三河の武士に対し、本領ほんりょうを安堵したり、同じ石高こくだかの領地替えを約束しています。こうした家康公の決断は、戦の長期化による兵力の消耗しょうもうの回避や、領地支配の速やかな安定がねらいだったと考えられます。しかし一方で、東三河の武士たちにとっては、敵対しながらも寛大な処遇しよぐうを得たことは、家康公への深い忠誠につながったことでしょう。

三河武士を自身の軍に取り込むことで勢力を拡大し、家康公はついに三河統一を成し遂げました。ここから家康公は天下取りの道まいしんを邁進していくことになります。

3 旗本先手役はたもとせんてやく〈三河武士の立役者たちたてやくしゃ〉

家康公を戦いの場で支えた立役者たちと言え、本多忠勝ほんだただかつ、榊原康政さかさきばらやすまさ、大久保忠世おおくぼただよ、鳥居元忠とりいもとただらに代表される「旗本先手役」と呼ばれる精鋭の譜代家臣たちです。

旗本先手役は家康公が三河を統一した永禄9年(1566)頃の、軍制改革時に設置されたものです。この軍制により、三河の国衆こくしゅうは東三河衆(旗頭はたがしら:酒井忠次)と、西三河衆(旗頭はたがしら:石川家成いしかわいえなり、その後いしかわかずまさに石川数正)、そして家康公直轄ちよつかつの旗本の三備みつづなえに再編されました。

旗本先手役は家康公直属の機動部隊として新たに編制されたもので、三河一向一揆で帰順した門徒家臣なども旗本に加えることで、自身の権力強化も行なったのです。彼らは前線で戦闘を行うだけでなく、親衛隊しんえいたいとしての側面も持っていました。したがって旗本先手役に属する家臣たちは家康公の居城きよじょうに常駐、不意の出動に備えていたと考えられます。家康の居城が移るに従い、彼らも岡崎城から浜松城、駿府城すんぷじょうへとその居を移してゆきました。

家康公 三河統一期の家臣団「三備の制」



序

「三河武士」という概念に、家康公と一枚岩の強固な絆が語り継がれてきました。戦場の強さもさることながら、生活は地味で、質朴なイメージもあり、質実剛健とも語られます。

その三河武士たちが家康公の生涯を通じてともに成長し、戦国時代から江戸の泰平を築く過程で全国各地に根差してゆきました。その人脈を追ってこの副読本の三河武士一覧などを整理してきました。

三河武士たちが、広く深く、この国のカタチに関わってきていることが想像されます。そして江戸の泰平を思うとき、武士たちの成長、その生き方に、江戸の平和の大切なものが潜んでいるように感じます。

それが、サムライ。

三河の土から天下の士へと、成長してゆきます。

そんなイメージで、「新・家康公検定」を進展させてゆくなら、その一歩として、三河武士たちのルーツ、松平一族と家臣たち、徳川創業の背景を考えながら、そこに展開される「ものがたり」を語ってゆきたいと思いました。

本年はその一歩。

三河武士たちを知って、興味を抱いてゆく機会とします。

まず徳川創業期に活躍した三河武士たち。彼らのすべてが初めから忠義心を持って家康公を支えたわけではありません。それぞれの家や一族の事情の中で、戦国動乱の時代を生き抜いてきました。

1 家康公を、支えてきた三河武士

戦国の時代に「忠誠」という概念は少なく、小さな集団の武士たちにとって、一族や家を守ることが第一義であったものと思います。優れたリーダーに仕え、頼りないリーダーから離反してゆくのは下克上の世の常でした。

家康公が生まれたころ、西三河は尾張の織田と駿河の今川の勢力争いに巻き込まれ、松平一族にとって不安定な時期でした。岡崎城の松平広忠は必死にリーダーシップを回復しようとしませんが、一族の内紛が絶えません。

この時代から広忠に従っていた譜代家臣たちは、酒井正親、酒井忠次、本多忠高（忠勝の父）、本多広孝、鳥居忠吉（元忠の父）、植村氏明、大久保忠俊（忠世の伯父）、平岩親吉、成瀬正一（正成の父）らがいます。彼らは家康公生誕後も父子を継いで松平宗家に忠誠を尽くし、家康公の天下平定の道の土台となっていた三河武士たちでした。

「忠誠」を超えた絆はなぜか、それが「三河武士論」の原点です。



【酒井忠次】（左衛門尉家）

徳川四天王の筆頭です。家康公の義理の叔父にあたり、15歳も年長であることから、徳川創業期家臣団の中でも「東三河旗頭」として軍師的な役割を果たしてきました。

東三河平定戦では今川方の最重要拠点、吉田城を攻め、城将の小原鎮実を降伏させます。その恩賞で吉田城主となります。これが、家康公の家臣としては西尾城の酒井正親に続いて二番目の「城持ち」となりました。

【酒井正親】(雅楽頭家)

家康公家臣の中でも最古参。永正18年(1521)誕生、家康公より21歳年長です。

家康公の祖父、松平清康の時代から出仕し、広忠、家康公と三代に渡って重臣としての役割を果たしました。特に清康が「是ノ字の夢」から龍海院を建立した際には、若くしてその檀那(檀家の代表)となり、後に墓も建立されます。

西三河平定で大きな役割を果たし、西尾城の城主に抜擢されました。

【本多忠勝】(平八郎家)

本多氏は、足利尊氏が九州の豊後から再起するときに従った古い関係。その一族は、徳川將軍家の家臣では、大名家13、旗本45家を有する最大の譜代門閥となりました。

忠勝は天文17年(1548)、蔵前(岡崎市西蔵前町)で誕生。父は忠高、母は植村氏の娘。父は翌年の安城城攻めで討死、その後は叔父の本多忠真のもとで養育されます。

三河一向一揆の折、一族が二分するも、宗派を変えて家康公に従いました。

関ヶ原の合戦の後、桑名10万石と大多喜5万石(二男忠朝に)を拝領、以後、各地に転封し、子孫は岡崎藩の藩主。

忠勝は岡崎藩祖として祀られることになりました。

【本多広孝】(豊後守家)

大永8年(1528)、三河国碧海郡土居郷(岡崎市土井町)で誕生。曾祖父の代から安城松平長忠に仕え、三河譜代となりました。三河一向一揆の際には嫡子、康重を忠節の証として家康公に差し出しています。

家康公の東三河平定戦では田原城(愛知県田原市)を陥落させ、田原城を与えられました。これは西尾城の酒井正親、吉田城の酒井忠次に次ぐ徳川家譜代家臣の城持ち衆として先駆的存在となります。

【本多重次】(作左衛門家)

鬼作左と呼ばれます。生誕地は岡崎の大平説と宮地説があり、宮地町の犬頭神社には重次の生誕地碑があります。三河一向一揆では改宗して家康公側に従いました。

軍制再編で、天野康景、高力清長と共に「三河三奉行」に抜擢され、「仏高力、鬼作左、どちへんなしの天野三兵」と称されます。長篠の戦いの陣中から妻に宛てて書いた手紙「一筆啓上火の用心 お仙泣かすな馬肥やせ」は「日本一短い手紙」として有名です。

【石川家成】

天文3年(1534)、三河国幡豆郡西野(西尾市)で誕生。父は家康公生誕の時に墓目の矢を放った石川清兼。石川一族の当主として家康公にも重く任用されました。最初の西三河旗頭。後、掛川城主となり甥の石川数正が西三河の旗頭となりました。大垣藩2代藩主。

ひらいわちかよし
【平岩親吉】

天文11年(1542)、三河国額田郡坂崎村で誕生。家康公と同年で、小姓として駿府での人質時代に従いました。

家康公の信任は厚く、嫡男 信康の傳役となります。

信康事件では、親吉は自らの首を信長に差し出すと申し出たと伝わります。

本能寺の変の後、甲斐国の郡代として、武田遺臣と共に国内経営に尽力し、その一揆を防ぎました。

関ヶ原の戦い後、再び甲府6万3千石を与えられました。

2年後、江戸幕府が開かれると徳川義直が甲斐25万石に封ぜられ、幼少の義直の傳役として甲斐統治を行いました。さらに義直が尾張藩主に転封されると、付家老として尾張に移り、併せて家康公直臣扱いの犬山城主として12万3千石を領しました。名古屋城二の丸御殿で死去。

その誠実な人柄ゆえに、家康公から絶大な信頼を得ていたと考えられますが、嗣子が無かったため、大名家平岩氏は親吉の死をもって断絶しました。

うえむらいえさだ
【植村家存】

天文10年(1541)、三河国碧海郡東本郷(岡崎市東本郷町)に生まれる。父氏明は守山で倒れた松平清康の仇を討ったことで有名。9歳の時から家康公に仕え、後に旗本先手役として活躍。

しかし、天正5年(1577)に37歳の若さで死去。

子孫は大和高取藩2万5千石藩主。

とりいもとただ
【鳥居元忠】

渡郷(岡崎市渡町)に生まれ、今川氏の人質時代からの家康公側近の一人で、年齢も近く、「百舌鳥を鷹のように飼いならせ」と無理難題を押し付けられた逸話も残ります。

家康公が元服し、竹千代が元信と改名した時、元忠も同じ年に元服改名、元忠の「元」も義元の一文字を与えられたという説もあります。

姉川の戦い、三方ヶ原の戦い、長篠の戦いなどすべての合戦に参陣しました。

関東への移封時には東北の諸大名の押さえとして、下総国矢作4万石。

慶長5年(1600)、関ヶ原合戦の前哨戦となる会津攻めの際、伏見城の城番を任された元忠は、松平家忠や内藤家長らとともに西軍の5万とも伝えられる軍勢と戦いました。城兵はわずか2千足らずでしたが、最後の最後まで西軍を食い止め玉砕(全員戦死)したのです。

元忠は生粋の三河武士気質の持ち主で、家康公の信頼に足る武士でした。「三河武士の鑑」と称えられます。

あんどうなおつぐ
【安藤直次】

弘治元年(1555)、碧海郡桑子村(岡崎市大和町)に誕生。

幼少より家康公に仕え、幾多の合戦で武功を挙げました。後に本多正純や成瀬正成らと幕政に参画、新参譜代(第二世代の三河譜代)と呼ばれます。紀州藩付家老で田辺城主として知られます。

【大久保忠世】

三河国碧海郡上和田郷（岡崎市上和田町）に誕生。大久保氏は宇都宮氏の分流で南北朝時代に三河に移住、宇津氏を名乗り松平三代 信光の時代から仕えたという最古参の譜代家臣です。

三河一向一揆では一族を挙げて門徒側と戦い、和睦の仲介まで行いました。

また三方ヶ原の戦いでは、浜松城に逃げ帰った後、犀ヶ崖に陣を構えていた武田軍を天野康景とともに夜襲して銃撃し、大混乱に陥れました。

長篠の戦いにおいても、馬防柵の前に出て戦った様子が合戦屏風にも描かれ、三河武士の心意気を示した姿として後世に語り継がれることになりました。

本能寺の変後、忠世は信州惣奉行として小諸城に在番、真田氏や武田遺臣たちの鎮撫にあたりました。鳥居元忠や平岩親吉とともに家康公からの信頼が特に厚かったことを示しています。

家康公が関東に移ると、小田原に4万5千石を与えられ、関東の守りの要の役割を果たします。

【成瀬正成】

永禄10年（1567）、成瀬正一の子として三河国影山城（岡崎市上六名）で誕生。幼少の頃より小姓として家康公に仕え、数多くの武勇伝を残します。江戸開幕後は幕政の中核を担い、後に尾張藩付家老となり、犬山藩初代藩主となります。

【榊原康政】

榊原氏は足利一族、三河仁木氏の一族とされ、後に伊勢榊原に移って榊原を称したとされます。後に三河に戻った分家筋が松平氏の家臣になりました。幼い頃から大樹寺で勉強に励み、13歳のとき家康公に仕え、三河一向一揆で初陣。家康公から武功を賞されて「康」の字を与えられます。

本多忠勝とは同年で、共に旗本先手役大将に抜擢されました。姉川の戦いで朝倉軍の側面攻撃を敢行し、多大な武功を立てたことが有名です。

小牧・長久手の合戦の折り、秀吉の織田家乗っ取りを非難する檄文を書き、これに憤怒した秀吉は康政の首に10万石を与えるという触れまで出したといわれます。

家康公が関東に移封されると、康政は上野国館林城（群馬県館林市）に10万石を与えられます。

「老臣 権を争うは亡国の兆しなり」と、老中を退き、三河武士らしい引き際の潔さがあります。

子孫は姫路藩や高田藩主となりました。

【阿部定吉】

永正2年（1505）、三河国碧海郡小針郷（岡崎市小針町）に生まれる。松平七代 清康に重臣として仕えましたが、守山の陣で嫡男の正豊が清康を殺害してしまいます。定吉にお咎めはなく、まだ幼少であった世継ぎの松平八代 広忠を守り、松平宗家存続に力を尽くしました。定吉の阿部家は断絶しますが、子が三河井上氏を継いだといわれ、子孫は浜松藩主として明治を迎えます。

2 家康公に、戻ってきた三河武士

戦国の世です。

置かれた立場で主君を替えざるを得ないもの、敢えて離反せざるを得ない事情もあり、しかし後に赦され、再仕官して素晴らしい活躍をした人たちがいます。

この時代に「赦される」ということが、三河武士を語る時の大切なキーワードでもあります。

例えば、奥三河の奥平氏（貞能、信昌父子）。

奥平氏は松平、今川、武田の勢力争いの中で、家名の存続の為に主君を替えながら奔走します。しかし、最後は、信昌が家康公の長女 亀姫を妻とした縁をもとに、長篠城の戦いにおける武田勝頼の猛攻を退け、長篠の戦いに勝利への道筋を示し、徳川家の一門として江戸幕府を支えました。

また、三河一向一揆において、宗旨に従って離反した武将たちがいます。

例えば、徳川十六神将に数えられる蜂屋貞次や渡辺守綱のほか、本多正信、夏目吉信、内藤清長などがいます。

蜂屋貞次は帰参後、吉田城攻めにおいて傷を負い、その傷がもとで死去。夏目吉信は三方ヶ原の戦いで家康公の身代わりとなり戦死。内藤清長は息子の家長が家康公側についたため、名家である内藤の家名は残ります。そして、この家長は、伏見城の戦いで家康公のために戦死をします。渡辺守綱は晩年まで槍働きで忠義に勤め、最後は、尾張藩の付家老として徳川義直を支え、命を捧げて忠義を尽くした例です。

そして、家康公が「友」と呼んだ、本多正信がいます。

【本多正信】（弥八郎家）

三河一向一揆では、門徒側の武将として弟 正重と共に家康公に敵対したと伝わります。

一揆後は出奔し、大和国の松永久秀に仕えました。さらに流浪し、加賀国では石山本願寺と連携、織田信長と戦ったとも伝えられ、反骨の武士だった一面がうかがえます。

諸国を流浪の末、大久保忠世を通じて帰参を許されます。

その後、政略家としての能力を発揮し、家康公が旧武田領を併合すると、奉行に任じられて武田家臣団を取り込みます。その後は家康公の生涯、側近として仕え、長男の正純とともに幕府政治の中核を担いました。

家康公が三遠駿の大名から関東八州、そして天下人へ駆け上る際の、まさに縁の下の武将でした。

このように、赦された後の身の処し方はそれぞれですが、何かしらの形で、家康公への忠義を示しています。このような忠義の在り方が、三河武士と評される人々の大切な要素となっています。



はちやはんのじょうさだつ
蜂屋半之丞貞次

わたなべもりつな
【渡辺守綱】

天文11年(1542)、三河国額田郡浦部村(岡崎市国正町)で誕生。

一向一揆の時は父とともに門徒側に与し、後に赦されると側近として家康公の大半の戦いに参加し活躍しました。姉川の戦いでは一番槍を挙げるなどの戦功を重ね、「槍半蔵」と呼ばれます。

後年は尾張藩付家老となり、寺部藩初代藩主となります。幕末動乱の頃、藩内は勤王と佐幕に二分、その騒動に巻き込まれ、佐幕派の棟梁、家老 渡辺新左衛門在綱を筆頭に、14名が斬首されました。

青松葉事件、慶應4年(1868)のこと。これがキッカケで尾張徳川家は勤王へ恭順、東海道、中山道沿いの大名家もこれに合わせて恭順し、明治維新を迎えました。ここにも三河武士の末裔たちがいました。

おくだいらまさのぶ
【奥平信昌】

弘治元年(1555)、三河国作手村(新城市作手)で生まれた。武田氏に従っていた国人でしたが、信玄亡き後は家康公に帰順、長篠の戦いで城を守りました。

家康公の長女 亀姫を妻とし、厚遇されました。美濃加納藩10万石初代藩主。



なつめよしのぶ
【夏目吉信】

三河国豊坂村(幸田町)で誕生、松平氏に仕える譜代家臣。三河一向一揆では門徒側に与し敗北するも、家康公に赦され、以後、岡崎城出仕の直臣として、恩義をもって活躍します。

三方ヶ原合戦で敗色濃厚な中、まだ若く無謀な家康公を説得して逃がし、身代わりとなり討死しました。浜松、犀ヶ崖資料館の傍らにその忠勇の碑があります。夏目氏の後裔に夏目漱石がいます。



みずのかつなり
【水野勝成】

永禄7年(1564)に三河国刈谷の生まれ。若くして家康公に仕え、出奔し、諸国を渡りながら8名の主に仕え、戻ってきました。仕えた主は、仙石、豊臣、佐々、立花、黒田、小西など全国を渡り歩き、家康公の元で刈谷城主になり、福山藩初代藩主となりました。その豊富な経験が、藩運営に活かされたものと思います。家康公の従兄弟、鬼日向といひます。



3 家康公に、新たに加わった三河武士

家康公の家臣の中には、もと松平・徳川氏と対立勢力として存在した家にルーツをもつ人も少なくありません。

水野信元・織田信長の家臣であった高木清秀は、後に徳川十六神将の一人に挙げられます。今川氏の縁戚でもあり、西郡（蒲郡市）で最後まで家康公に対峙した鶴殿長照などもそうした中に入れられます。

桶狭間の戦い以後、松平氏と今川氏の狭間に位置した東三河の武士たちは、難しい判断を迫られました。

吉田・田原の城から今川方が撤退し、家康公による三河の統一が決定的となった後も、牛久保城の牧野成定は抵抗を続けました。これは牧野氏が、もともと東三河に基盤をもっていたためとも考えられます。難攻不落の牛久保に籠り、必死に戦い続ける牧野氏と正面衝突するのを避けた家康公は、牧野成定の権益を保障して戦を終結させました。

以後、牧野氏は、家康公の臣下として活躍してゆきました。

なお牧野氏は、越後長岡藩主として明治維新を迎え、明治元年（1868）の北越戊辰戦争では、河井継之助を中心に、徳川家のために最後まで明治新政府軍に抗戦しています。

戦国と明治の二つの時代で、圧倒的に不利な状況でも、自身の信念と忠義のために戦い抜いた牧野氏もまた、三河武士の象徴的存在と言えるのではないのでしょうか。

「受け入れる」のも、家康公と三河武士たちを語る大切なキーワードです。

【高木清秀】

大永6年（1526）、碧海郡牧内村（岡崎市東牧内町）生まれ。刈谷の水野氏に仕え、三河一向一揆では苦戦する家康公を助けます。後に織田信長に仕え多くの武功を挙げ、本能寺の変後は家康公に出仕し、譜代となりました。

慶長15年（1610）、85歳で死去。

子孫は河内国丹南藩主。

【戸田重貞】

渥美郡田原城の戸田氏が有名ですが、家康公が幼少のころ今川氏に背き、この戸田氏は滅亡しています。

重貞は吉田城近くの二連木城に居た戸田一族。重貞をはじめ三河国の国人は今川氏に従属していましたが、今川義元亡き後は次第に離反し始めます。

家康公は重貞に本領に加えて新地を与える起請文を出し、酒井忠次の吉田城攻めに味方させました。以後、家康公に仕え、跡を継いだ甥の康長は松平姓を賜っています。重貞は吉田城攻めにおいて討死しましたが、子孫は6家が大名として明治を迎え、宗家は松本藩主、別家に大垣藩10万石などがあります。



4 ここにも三河武士

「忠誠一途」も「赦す度量」も「受け入れる勇氣」もあり、戦国の世にあって多様な縁を手中にしてゆく家康公に深く学ぶものがあります。

人間・徳川家康公は成長し続けます。再び戦のない世を深く構想し、学習を続け、それぞれの事情を理解してゆく真摯な姿勢に多くの家臣たちが付いてゆきます。

だから、多様な三河武士たちがいます。家康公の「志」を学び、共有し、支えてゆきます。

戦国乱世を正してゆくときも、
社会の危機を乗り越えてゆくときも、
新しい時代を開いてゆくときも、
歴史の中には
いつも素晴らしい人材が生まれてゆきます。
その時、三河武士を感じます。



【井伊直政】

井伊直政は三河武士か、とたびたび論じられます。

名門井伊家は、遠江国。井伊谷に生まれ、今川家との確執に翻弄された幼少期を脱し、家康公に付き、大成長をしてゆきます。戦国最強の、井伊の赤備え隊は先陣を切って駆け、武勇を重ねてゆきました。

「井伊家は徳川家への忠節一筋」を旨とし、江戸幕府に4人の大老を出して治世に務め、幕末、大老井伊直弼は開国への道筋を立て桜田門外に散ってゆきました。ここにも三河武士を見る思いです。

【石川数正】

天文2年(1533年)、三河国で誕生した。石川清兼は祖父、家成は叔父。家康公が人質時代からの側近で、最年長者で信頼も厚い。以後、西三河旗頭・土呂城主(岡崎市福岡町)・岡崎城代など、家康公の懐刀として活躍します。特に駿府に残された妻子を救い出した功績は大きいものがあります。

小牧・長久手の合戦後に豊臣秀吉のもとに出奔しましたが、その原因や理由は明らかではありません。

【板倉勝重】





天文14年(1545)、三河國小美村(岡崎市小美町)で板倉好重の三男として誕生。いったん出家しましたが、父も兄も戦死し、板倉家が無嫡子断絶することを惜しんだ家康公の命で還俗、家名を継ぎました。

後に駿府町奉行、江戸町奉行などを務め、関ヶ原合戦後は京都所司代として、朝廷との交渉で力を発揮しました。

家康公の宝もの、三河武士たち一覧

家康公に仕え、その後、各地を治めていった主な三河武士たち。
※旗本家など一部例外を含む。

《参考資料》

三河武士	★ここがポイント	そして三河武士は全国各地へ ◆主な分家、別家
<p>さかい 酒井 さえもん^のじょうただつぐ 左衛門尉忠次 (1527~1596)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・三河国額田郡井田郷（岡崎市井田町）出身。 ・徳川創業期の家臣団筆頭で徳川四天王筆頭。 ・三河統一後は東三河の旗頭として吉田城（豊橋市）に入り東三河の国人衆や松平諸家をまとめる。 	<p>臼井藩（千葉県佐倉市）→高崎藩（群馬県高崎市）→高田藩（新潟県上越市）→松代藩（長野県長野市）→庄内藩（山形県鶴岡市）</p> <p>◆松山藩（山形県酒田市）</p>
<p>さかい 酒井 うたのかみまさちか 雅楽頭正親 (1521~1576)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・家老として清康・広忠・家康の三代に仕える。 ・永禄4年（1561）の西尾城攻めに功があり、家臣で最初に城（西尾城）を与えられる。 	<p>川越藩（埼玉県川越市）→前橋藩（群馬県前橋市）→姫路藩（兵庫県姫路市）</p> <p>◆伊勢崎藩（群馬県伊勢崎市）◆田中藩（静岡県藤枝市）→川越藩→小浜藩（福井県小浜市）◆勝山藩（千葉県鋸南町）◆敦賀藩（福井県敦賀市）</p>
<p>ほんだ 本多 へいはちろうただかつ 平八郎忠勝 (1548~1610)</p>  	<ul style="list-style-type: none"> ・三河国額田郡蔵前（岡崎市西蔵前町）出身。 ・名槍「蜻蛉切」と鹿角の兜で知られる徳川四天王のひとり。一言坂の戦いの進退の見事さから武田の武将より「家康に過ぎたるものが二つあり、唐の頭に本多平八」と称賛される。 <p>※唐の頭とは当時珍重品だった舶来のヤク（チベットなど高地に生息するウシ科の動物）の毛で飾った兜のこと。</p>	<p>大多喜藩（千葉県大多喜町）→桑名藩（三重県桑名市）→姫路藩（兵庫県姫路市）→郡山藩（奈良県大和郡山市）→福島藩（福島県福島市）→姫路藩→村上藩（新潟県村上市）→刈谷藩（愛知県刈谷市）→古河藩（茨城県古河市）→浜田藩（島根県浜田市）→岡崎藩（愛知県岡崎市）</p> <p>◆大多喜藩→郡山藩→山崎藩（兵庫県宍粟市）◆龍野藩（兵庫県たつの市）→本家相続 ◆掛川藩（静岡県掛川市）→村上藩（新潟県村上市）→白河藩（福島県白河市）◆宇都宮藩（栃木県宇都宮市）→郡山藩→改易 ◆石川藩（福島県石川郡）→拳母藩（愛知県豊田市）→相良藩（静岡県牧之原市）→改易 ◆浅川藩（福島県石川郡）→伊保藩（愛知県豊田市）→相良藩→泉藩（福島県いわき市）◆足助藩（愛知県豊田市）→改易 ◆明石藩（兵庫県明石市）→大久保藩（福島県須賀川市）→改易</p>


 ほんだ
 本多
 さくさえもんしげつぐ
 作左衛門重次
 (1529~1596)

- ・三河三奉行「鬼作左」。長篠の陣中から妻に送った「一筆啓上火の用心お仙泣かすな馬肥やせ」の文は日本一短い手紙として知られる。
 ※お仙とは嫡男成重（幼名仙千代）のこと
- ・出生地は岡崎市大平町とも宮地町ともいう。

古井戸（千葉県君津市）→井野（茨城県取手市）

- ◆丸岡藩（福井県坂井市）→旗本
- ◆越前松平家 付家老・越前府中城主（福井県越前市）※重次の兄の家系は家康公二男 結城秀康（越前松平家＝福井藩）に仕え、代々、筆頭家老を務める。


 ほんだ
 本多
 ぶんごのかみひろたか
 豊後守広孝
 (1528~1598)

- ・三河国碧海郡土居郷（岡崎市土井町）出身。
- ・永禄7年（1564）東三河進攻で田原城（田原市）を陥落させ、関東移封まで田原城主。
- ・嫡男康重は初代岡崎藩主で宿場町（岡崎二十七曲）の整備と江戸時代最長の矢作橋を架橋。

白井藩（群馬県渋川市）→岡崎藩（愛知県岡崎市）→横須賀藩（静岡県掛川市）→村山藩（山形県村山市）→糸魚川藩（新潟県糸魚川市）→飯山藩（長野県飯山市）


 ほんだ
 本多
 やはちろうまさのぶ
 弥八郎正信
 (1538~1616)

- ・三河一向一揆では一揆側に付き、収束後は諸国を流浪。松永弾正久秀に「三河の士、多くは勇武の士なれど、ひとり正信は剛ならず柔ならず、また卑しからず」と賞された智謀の士。帰参後は参謀として働き、晩年は家康、秀忠の許で初期幕政を主導した。

玉縄藩（神奈川県鎌倉市）→小山藩（栃木県小山市）→宇都宮藩（栃木県宇都宮市）→改易
 ◆榎本藩（栃木県栃木市）→無嗣断絶 ◆舟戸藩（千葉県柏市）→沼田藩（群馬県沼田市）→田中藩（静岡県藤枝市）→長尾藩（千葉県南房総市）
 ※加賀前田藩筆頭家老（石川県金沢市）


 ほんだ
 本多
 ひこはちろうただつぐ
 彦八郎忠次
 (1547~1613)

- ・三河伊奈城主（豊川市伊奈町）
- ・松平七代 清康の東三河平定に功を挙げた祖父正忠と同様、家康公の東三河平定に活躍。松平家の葵紋は、清康が正忠より譲り受けたとも伝わる。

西尾藩（愛知県西尾市）→膳所藩（滋賀県大津市）→西尾藩→亀山藩（三重県亀山市）→膳所藩
 ◆西代藩（大阪府河内長野市）◆神戸藩（三重県鈴鹿市）◆西端藩（愛知県碧南市）


 さかきばらやすまさ
 榊原康政
 (1548~1606)

- ・三河国上野郷（豊田市上郷町）出身。
- ・徳川四天王のひとり。小牧・長久手の合戦では、秀吉を主家（織田家）を滅ぼさんとする大逆無道の者と喧伝し秀吉軍を動揺させるなど「知勇兼備にして最も人品高し」と評される。

館林藩（群馬県館林市）→白河藩（福島県白河市）→姫路藩（兵庫県姫路市）→村上藩（新潟県村上市）→姫路藩→高田藩（新潟県上越市）

いいなおまさ
井伊直政
(1561~1602)



・徳川四天王。遠江井伊谷（浜松市引佐町）出身ながら岡崎譜代に数えられ、赤備え軍団を率い活躍。江戸期を通じ、譜代筆頭 30 万石（彦根藩）の家格を誇る。

箕輪藩・高崎藩（群馬県高崎市）→彦根藩（滋賀県彦根市）
◆安中藩（群馬県安中市）→西尾藩（愛知県西尾市）→掛川藩（静岡県掛川市）→与板藩（新潟県長岡市）

おおくぼただよ
大久保忠世
(1532~1594)



・三河国碧海郡上和田（岡崎市上和田町）出身。
・三河一向一揆では一族を挙げて上和田砦を死守し、三方ヶ原の戦いでは、敗戦の後、犀ヶ崖で武田軍を夜襲し一矢を報いる。初代小田原藩主。

小田原藩（神奈川県小田原市）→騎西藩（埼玉県加須市）→加納藩（岐阜県岐阜市）→明石藩（兵庫県明石市）→唐津藩（佐賀県唐津市）
→佐倉藩（千葉県佐倉市）→小田原藩
◆烏山藩（栃木県那須烏山市）

おおくぼただすけ
大久保忠佐
(1537~1613)



・武田勝頼との長篠・設楽原の戦いでは、織田信長から「良き膏薬のごとし。敵について離れぬ膏薬侍なり」とその戦上手を称賛される。

沼津藩（静岡県沼津市）→無嗣断絶

おおくぼ
大久保
彦左衛門忠教
(1560~1639)



・松平家・徳川家と大久保一族の歴史や功績を中心に武士の生き方を子孫に残した家訓書である「三河物語」の著者として知られる。忠世、忠佐の弟。

旗本 ※陣屋を現在の愛知県幸田町に置く。

とりいもとただ
鳥居元忠
(1539~1600)



・三河国碧海郡渡郷（岡崎市渡町）出身。
・家康公より3歳年長で人質時代から仕え、関ヶ原の前哨戦である伏見城の戦いでは守将として玉砕。その忠節は「三河武士の鑑」と称された。

矢作藩（千葉県香取市）→磐城平藩（福島県いわき市）→山形藩（山形県山形市）→高遠藩（長野県伊那市）→能登下村藩（石川県七尾市）→水口藩（滋賀県甲賀市）→壬生藩（栃木県壬生町）
◆谷村藩（山梨県都留市）→改易

とりいただひろ
鳥居忠広
(?~1573)



・元忠の弟
・三河一向一揆では家康公に敵対するが赦され帰参。三方ヶ原の戦いで全軍を逃すため殿軍（しんがり）をつとめ戦死。

子孫は小田原藩大久保家に仕える。

いしかわいえなり
石川家成
(1534~1609)



- ・三河一向宗徒の総代的立場にありながら、一向一揆の際には改宗して家康公に忠誠を尽くし、鎮庄後は西三河の旗頭として三河武士団をまとめる。
- ・永禄12年(1569)掛川城主となり、西三河の旗頭を甥の数正に譲る。

成戸藩(千葉県山武市)→大垣藩(岐阜県大垣市)→日田藩(大分県日田市)→佐倉藩(千葉県佐倉市)→膳所藩(滋賀県大津市)→亀山藩(三重県亀山市)→淀藩(京都府京都市)→備中松山藩(岡山県高梁市)→亀山藩
◆下館藩(茨城県筑西市)

いしかわかづまさ
石川数正
(1533~1593?)



- ・側近として駿府人質時代から家康公を支え、西三河の旗頭を継ぐも、小牧・長久手の合戦後に岡崎から秀吉のもとに謎の出奔。秀吉の側近として家康公を守ろうとしたとの説もある。

松本藩(長野県松本市)→改易

あまのやすかげ
天野康景
(1537~1613)



- ・本多重次、高力清長と共に三河三奉行に任じられ、その公平、慎重な判断から「仏高力、鬼作左、どちへんなしの天野三兵」と評される。

興国寺藩(静岡県沼津市)→改易→旗本

こうりききよなが
高力清長
(1530~1608)



- ・三河国額田郡高力村(額田郡幸田町)出身。
- ・三河一向一揆鎮庄後は仏像や経典の保護、寺社の復興に努め、心が広く温厚で清廉な人柄から「仏高力」と称された。三河三奉行のひとり。

岩槻藩(埼玉県さいたま市)→浜松藩(静岡県浜松市)→島原藩(長崎県島原市)→改易→旗本

ひらいわかよし
平岩親吉
(1542~1611)



- ・三河国額田郡坂崎村(額田郡幸田町)出身。
- ・家康公と同年で人質時代から従う。家康公の長男信康の傅役、後に九男義直の傅役と付家老を命じられ犬山城を領し、尾張藩の基礎固めに尽力。

厩橋藩(群馬県前橋市)→尾張徳川家付家老・犬山城主(愛知県犬山市)

はっとり
服部
はんそうまさなり
半蔵正成
(1542~1597)



- ・三河国額田郡伊賀(岡崎市伊賀町)出身とも。
- ・鬼半蔵の異名を持つ槍の遣い手。本能寺の変の際、堺(大阪府堺市)にいた家康一行を先祖の地である「伊賀越え」ルートで救い、以後、伊賀衆を率いた。

旗本(伊賀同心支配)

わたなべ
渡辺
ほんぞうもりつな
半蔵守綱
(1542~1620)



- ・三河国額田郡浦部村（岡崎市国正町）出身。
- ・槍が得意で「槍半蔵」と呼ばれ、同年の「鬼半蔵」服部正成と並び称される。一向一揆では一揆方に付いたが赦され、後に尾張藩付家老となる。

旗本→尾張徳川家 付家老・寺部城主（豊田市寺部町）
◆伯太藩（大阪府和泉市）

はやし
林
とうごろうただまさ
藤五郎忠政
(1564~1622)



- ・幼少時より家康公の小姓として仕え旗本に列す。幕府の正月の吉例である「兎の吸い物」の振舞いは林家初代光政と松平初代親氏の伝説に因む。

旗本→請西藩（千葉県木更津市）

なるせまさなり
成瀬正成
(1567~1625)



- ・関ヶ原後、老中として本多正純、安藤直次らと共に初期幕政を担う。平岩親吉没後は尾張藩付家老を命じられ、代々、犬山城主を務める。

栗原藩（千葉県船橋市）→尾張徳川家 付家老・犬山城主（愛知県犬山市）

あんどうなおつぐ
安藤直次
(1555~1635)



- ・三河桑子城主（岡崎市大和町）
- ・関ヶ原後、老中として幕政や大御所政治を担い、家康公没後は十男頼宣の付家老として紀州田辺城主を務める。弟の家系は大家家として存続。幕末に公武合体を進めた老中 安藤信正がでる。

掛川藩（静岡県掛川市）→紀伊徳川家 付家老・田辺城主（和歌山県田辺市）
◆小見川藩（千葉県香取市）→高崎藩（群馬県高崎市）→備中松山藩（岡山県高梁市）→加納藩（岐阜県岐阜市）→磐城平藩（福島県いわき市）

うえむら
植村
しんろくろういさだ
新六郎家存
(1541~1577)



- ・三河国碧海郡東本郷（岡崎市東本郷町）出身。
- ・七代清康、八代広忠、二君の仇を討ったと伝わる氏明は父。家存は家康公に従い清州城に赴いた際、その忠義を信長に称賛され太刀を賜る。

旗本→高取藩（奈良県高取町）
◆勝浦藩（千葉県勝浦市）→改易→旗本

はちや
蜂屋
はんのじょうきだつぐ
半之丞貞次
(1539~1564)



- ・三河六名城主（岡崎市六名町）
- ・三河一向一揆で一揆側に与するが、家康公の姿を見ると逃げたという。大久保氏の仲介を得て帰参。吉田城攻めで先陣を争い、戦死した。

旗本
※26歳で戦死した貞次には娘がひとりあり、家康公は鳥居家から婿を取らせ蜂屋の家を継がせて旗本とした。

あべまさかつ
阿部正勝
(1541~1600)



- ・人質の竹千代に近侍し共に元服したという。長男の子重次、二男の子忠秋が共に老中に。
- ・子孫に、幕末に安政の改革を行った老中首座阿部正弘がいる。

ないとういえなが
内藤家長
(1546~1600)



- ・一向宗徒であったが一向一揆では父と別れ家康公に味方する。弓の名手で「無双の弓手」と称えられた。伏見城の戦いで鳥居元忠と共に戦死。

ないとうきよなり
内藤清成
(1555~1608)



- ・家康公三男 秀忠の傅役。関東移封後は関東総奉行・江戸町奉行、老中などを歴任、初期幕政を支える。
※広大な敷地内に甲州街道の宿場が新設（内藤新宿）され、新宿区内藤町の地名が残る。

あおやまただなり
青山忠成
(1551~1613)



- ・三河百々城主（岡崎市百々町）
- ・内藤清成同様、秀忠の傅役を経て関東総奉行・江戸町奉行、老中として初期幕政に重きをなす。
- ・家康公から拝領の広大な敷地跡は現在の東京・青山の地名として残る。

たかぎきよひで
高木清秀
(1526~1610)



- ・三河一向一揆では水野氏に属し家康公を援け、家康公よりその働きを賞される。後に織田氏、佐久間氏に仕え、本能寺の変後は家康公の許で数々の武功を挙げる。

鳩ヶ谷藩（埼玉県川口市）→大多喜藩（千葉県大多喜町）→小田原藩（神奈川県小田原市）→岩槻藩（埼玉県さいたま市）→宮津藩（京都府宮津市）→宇都宮藩（栃木県宇都宮市）→福山藩（広島県福山市）
◆壬生藩（栃木県壬生町）→忍藩（埼玉県行田市）→白河藩（福島県白河市）→棚倉藩（福島県棚倉町）◆刈谷藩（愛知県刈谷市）→佐貫藩（千葉県富津市）

佐貫藩（千葉県富津市）→磐城平藩（福島県いわき市）→延岡藩（宮崎県延岡市）
◆泉藩（福島県いわき市）→安中藩（群馬県安中市）→拳母藩（愛知県豊田市）◆湯長谷藩（福島県いわき市）
◆駿府藩（静岡県静岡市）→長浜藩（滋賀県長浜市）→高槻藩（大阪府高槻市）→伏見藩（京都府京都市）→棚倉藩（福島県棚倉町）→田中藩（静岡県藤枝市）→村上藩（新潟県村上市）

勝山藩（千葉県鋸南町）→富田林藩（大阪府富田林市）→高遠藩（長野県伊那市）
◆鳥羽藩（三重県鳥羽市）→改易 ◆赤沼藩（埼玉県比企郡）→岩村田藩（長野県佐久市）

江戸崎藩（茨城県稲敷市）→岩槻藩（埼玉県さいたま市）→大多喜藩（千葉県大多喜町）→小諸藩（長野県小諸市）→浜松藩（静岡県浜松市）→丹波亀山藩（京都府亀岡市）→篠山藩（兵庫県篠山市）
◆掛川藩（静岡県掛川市）→尼崎藩（兵庫県尼崎市）→飯山藩（長野県飯山市）→宮津藩（京都府宮津市）→郡上藩（岐阜県郡上市）

丹南藩（大阪府松原市）



よねきつねはる
米津常春
(1524~1612)

- ・三河国碧海郡米津（西尾市米津町）出身。
- ・天文18年(1549)の安城合戦で織田信広(信長の兄)を捕らえる活躍をしたと云われ、人質交換で織田からの竹千代奪還に功績。一向一揆でも家康側で活躍。

旗本→改易

◆旗本（江戸北町奉行）→久喜藩（埼玉県久喜市）→長瀨藩（山形県東根市）



いたくらかつしげ
板倉勝重
(1545~1624)

- ・三河国額田郡小美村（岡崎市小美町）出身。
- ・駿府町奉行、江戸町奉行、京都町奉行を歴任。名奉行として名を馳せ、京都所司代として京都の治安維持と朝廷対策、大坂の豊臣対策にも力を発揮した。

関宿藩（千葉県野田市）→伊勢亀山藩（三重県亀山市）→鳥羽藩（三重県鳥羽市）→亀山藩→備中松山藩（岡山県高梁市）

◆深溝藩（愛知県幸田町）→三河中島藩（愛知県岡崎市）→烏山藩（那須烏山市）→岩槻藩（埼玉県さいたま市）→坂木藩（長野県埴科郡坂城町）→福島藩（福島県福島市）◆安中藩（群馬県安中市）→泉藩（福島県いわき市）→相良藩（静岡県牧之原市）→安中藩 ◆高滝藩（千葉県市原市）→庭瀬藩（岡山県岡山市）



なつめよしのぶ
夏目吉信
(1518~1573)

- ・三河六栗城主（額田郡幸田町）
- ・三河一向一揆では一揆方で戦ったが、赦されて帰参。三方ヶ原の合戦で家康公の身代わりとなって討死した。
※明治の文豪 夏目漱石は子孫。

旗本



おおすがやすたか
大須賀康高
(1527~1589)

- ・三河統一後は旗本先手役に抜擢され、遠江平定戦では高天神城の戦いなどで活躍。四天王に劣らぬその武功から松平姓を与えられた。

久留里藩（千葉県君津市）→横須賀藩（静岡県掛川市）→榊原家（館林藩）を相続し、大須賀家は絶家。



いのうえまさなり
井上正就
(1577~1628)

- ・松平清康の重臣 阿部定吉の子（諸説あり）の清秀が縁戚の井上家を継ぎ、その子が正就という。早くから秀忠に近侍し、老中を務める。

横須賀藩（静岡県掛川市）→笠間藩（茨城県笠間市）→郡上藩（岐阜県郡上市）→丹波亀山藩（京都府亀岡市）→下館藩（茨城県筑西市）→笠間藩→磐城平藩（福島県いわき市）→浜松藩（静岡県浜松市）→棚倉藩（福島県棚倉町）→館林藩（群馬県館林市）→浜松藩



ながいなおかつ
永井直勝
(1563~1626)

- ・小牧・長久手の合戦で池田恒興を討ち取る。大坂の陣でも戦功を挙げ大名に取り立てられる。
※子孫に作家の永井荷風や三島由紀夫がいる。

小幡藩（群馬県甘楽郡）→笠間藩（茨城県笠間市）→古河藩（茨城県古河市）・潤井戸藩（千葉県市原市）→淀藩（京都府京都市）→宮津藩（京都府宮津市）→大和新庄藩（奈良県葛城市）→櫛羅藩（奈良県御所市）


とだやすなが
戸田康長
(1562~1633)

・元服時に家康公から一字を受け、康長を名乗り戸田宗家を継ぐ。家康公の異父妹^{いふまい}を妻に迎え、松平姓を賜る。関東移封に伴い大名に列した。

東方藩（埼玉県深谷市）→白井藩（群馬県渋川市）→古河藩（茨城県古河市）→笠間藩（茨城県笠間市）→高崎藩（群馬県高崎藩）→松本藩（長野県松本市）→明石藩（兵庫県明石市）→加納藩（岐阜県岐阜市）→淀藩（京都府京都市）→鳥羽藩（三重県鳥羽市）→松本藩

◆田原藩（愛知県田原市）→富岡藩（熊本県天草郡）→岩槻藩（埼玉県さいたま市）→佐倉藩（千葉県佐倉市）→高田藩（新潟県上越市）→宇都宮藩（栃木県宇都宮市）→島原藩（長崎県島原市）→宇都宮藩 ◆足利藩（栃木県足利市）◆高德藩（栃木県日光市）◆膳所藩（滋賀県大津市）→尼崎藩（兵庫県尼崎市）→大垣藩（岐阜県大垣市）◆畠村藩（愛知県田原市）


おくだいらのぶまさ
奥平信昌
(1555~1615)

・武田勝頼による長篠城（新城市）攻めに籠城戦^{ろうじょうせん}で対抗。家臣の鳥居強右衛門^{すねえもん}が岡崎城に援軍要請に走る。
・家康公の長女 亀姫を妻（正室）とし、関ヶ原戦後は京都所司代を務め西軍の安国寺恵瓊を捕縛する。

小幡藩（群馬県甘楽郡）→加納藩（岐阜県岐阜市）→宇都宮藩（栃木県宇都宮市）→山形藩（山形県山形市）→宇都宮藩→宮津藩（京都府宮津市）→中津藩（大分県中津市）

◆作手藩（愛知県新城市）→亀山藩（三重県亀山市）→大坂藩（大阪府大阪市）→郡山藩（奈良県大和郡山市）→姫路藩（兵庫県姫路市）→山形藩→宇都宮藩→白河藩（福島県白河市）→山形藩→福山藩（広島県福山市）→桑名藩（三重県桑名市）→忍藩（埼玉県行田市）


すがぬまさだみつ
菅沼定盈
(1542~1604)

・東三河 野田城主（新城市）。桶狭間の合戦後、今川を離れ家康公に従う。遠江侵攻、長篠の合戦にも戦功があり、関東移封に伴い大名に列した。

阿保藩（群馬県）→長島藩（三重県桑名市）→膳所藩（滋賀県大津市）→亀山藩（京都府亀岡市）→旗本


まきのやすなり
牧野康成
(1555~1610)

・東三河 牛久保城主（豊川市）。最後まで今川方で戦った父 成定^{なりさだ}が降伏し、家康公の三河統一が実現。後を継いだ康成は東三河の旗頭 酒井忠次の傘下^{さんか}で活躍を重ね、関東移封に伴い大名に列す。

大湖藩（群馬県前橋市）→長峰藩（新潟県上越市）→長岡藩（新潟県長岡市）

◆与板藩（新潟県長岡市）→小諸藩（長野県小諸市）◆関宿藩（千葉県野田市）→吉田藩（愛知県豊橋市）→延岡藩（宮崎県延岡市）→笠間藩（茨城県笠間市）◆三根山藩（新潟県新潟市）

<三河武士たちが治めたまち 137>

※徳川・松平一門は除く

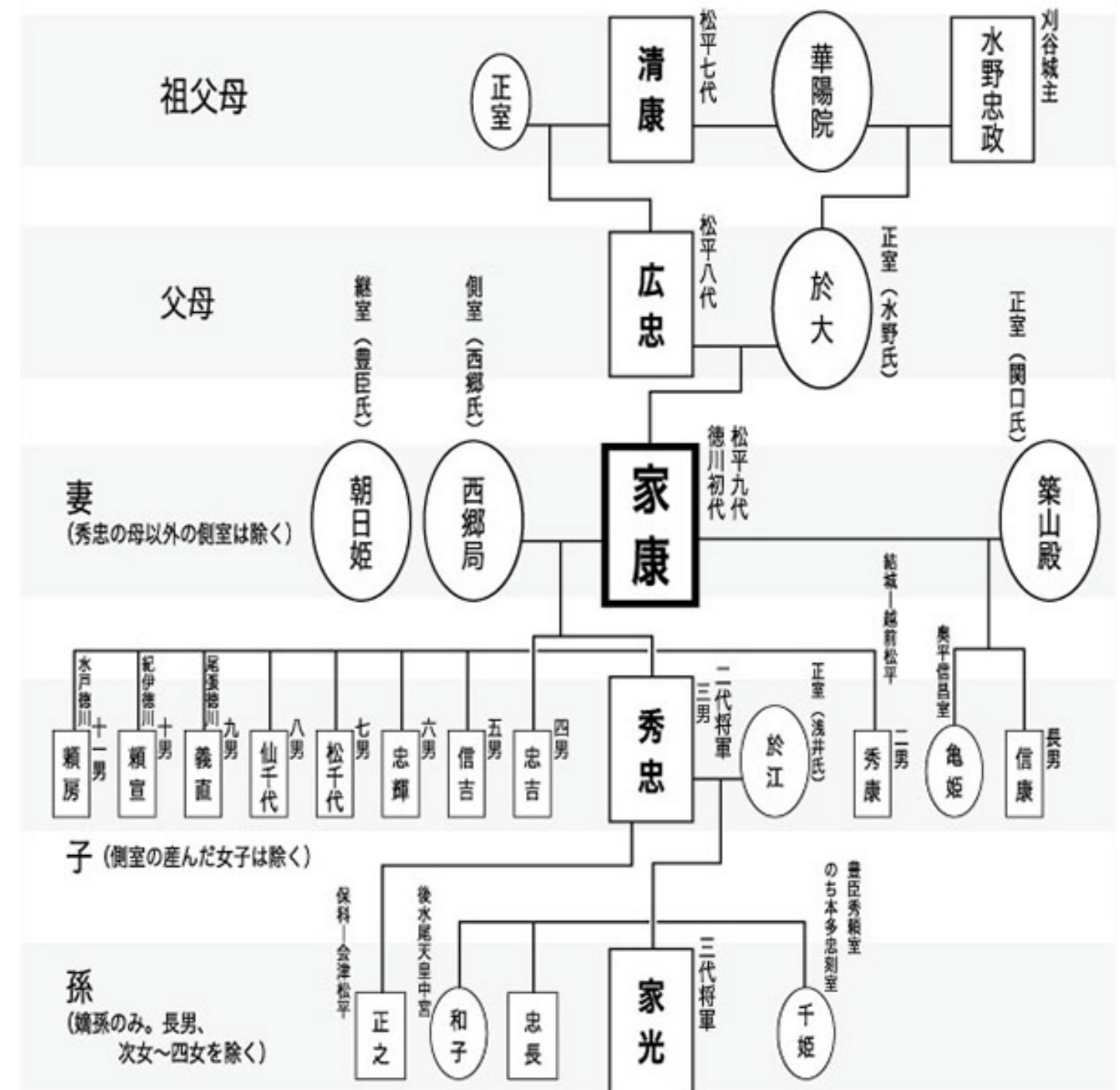
県名 (旧国名)	現在の市町名 (藩名)	市町数
山形県 ^{でわ} (出羽)	鶴岡市 (庄内藩)、酒田市 (松山藩)、東根市 (長瀬藩)、村山市 (村山藩)、山形市 (山形藩)	5
福島県 ^{むつ} (陸奥)	福島市 (福島藩)、いわき市 (泉藩、磐城平藩、湯長谷藩)、白河市 (白河藩)、須賀川市 (大久保藩)、石川郡 (石川藩、浅川藩)、東白川郡棚倉町 (棚倉藩)	6
群馬県 ^{こうづけ} (上野)	安中市 (安中藩)、伊勢崎市 (伊勢崎藩)、渋川市 (白井藩)、高崎市 (箕輪藩、高崎藩)、館林市 (館林藩)、沼田市 (沼田藩)、前橋市 (厩橋藩、大湖藩、前橋藩)、甘楽郡甘楽町 (小幡藩)	8
栃木県 ^{しもつけ} (下野)	足利市 (足利藩)、宇都宮市 (宇都宮藩)、小山市 (雄山藩)、栃木市 (榎本藩)、那須烏山市 (烏山藩)、日光市 (高德藩)、下都賀郡壬生町 (壬生藩)	7
茨城県 ^{ひたち} (常陸)	稲敷市 (江戸崎藩)、笠間市 (笠間藩)、古河市 (古河藩)、常総市 (大輪藩)、筑西市 (下館藩)、取手市 (井野)、結城市 (下総山川藩、結城藩)	7
千葉県 ^{かずさ} (上総、下総、 ^{あわ} 安房)	市原市 (潤井戸藩、菊間藩、高滝藩、鶴牧藩)、柏市 (舟戸藩)、勝浦市 (勝浦藩)、香取市 (小見川藩、矢作藩)、木更津市 (請西藩)、君津市 (久留里藩、古井戸)、佐倉市 (白井藩、佐倉藩)、館山市 (北条藩)、野田市 (関宿藩)、富津市 (佐貫藩)、船橋市 (栗原藩)、南房総市 (長尾藩)、山武市 (成戸藩)、安房郡鋸南町 (勝山藩)、夷隅郡大多喜町 (大多喜藩)	15

埼玉県^{むさし}(武蔵)

埼玉県 ^{むさし} (武蔵)	加須市 (騎西藩)、川口市 (鳩ヶ谷藩)、川越市 (川越藩)、行田市 (忍藩)、久喜市 (久喜藩)、さいたま市 (岩槻藩)、深谷市 (東方藩)、北足立郡伊奈町 (小室藩)、比企郡鳩山町 (赤沼藩)	9
神奈川県 ^{さがみ} (相模)	小田原市 (小田原藩)、鎌倉市 (玉縄藩)	2
山梨県 ^{かい} (甲斐)	都留市 (谷村藩)	1
新潟県 ^{えちご} (越後)	糸魚川市 (糸魚川藩)、上越市 (高田藩、長峰藩)、長岡市 (与板藩)、新潟市 (三根山藩)、村上市 (村上藩)	5
長野県 ^{しなの} (信濃)	飯山市 (飯山藩)、伊那市 (高遠藩)、小諸市 (小諸藩)、佐久市 (岩村田藩)、長野市 (松代藩)、松本市 (松本藩)、埴科郡坂城町 (坂木藩)	7
静岡県 ^{するが} (駿河、遠江)	掛川市 (掛川藩、横須賀藩)、静岡市 (駿府藩)、沼津市 (沼津藩、興国寺藩)、浜松市 (浜松藩)、藤枝市 (田中藩)、牧之原市 (相良藩)	6
愛知県 ^{あわり} (尾張、三河)	犬山市 (尾張藩犬山)、岡崎市 (岡崎藩、中島藩、西大平藩)、刈谷市 (刈谷藩)、新城市 (新城藩、作手藩)、田原市 (田原藩、島村藩)、豊田市 (足助藩、伊保藩、拳母藩、尾張藩寺部)、豊橋市 (吉田藩)、西尾市 (西尾藩)、碧南市 (大浜藩、西端藩)、知多郡東浦町 (緒川藩)、額田郡幸田町 (深溝藩)	11
岐阜県 ^{みの} (美濃)	大垣市 (大垣藩)、岐阜市 (加納藩)、郡上市 (郡上藩)	3
三重県 ^{いせ} (伊勢、志摩)	亀山市 (伊勢亀山藩)、桑名市 (桑名藩、長島藩)、鈴鹿市 (神戸藩)、鳥羽市 (鳥羽藩)	4
石川県 ^{のと} (能登)	七尾市 (能登下村藩、西谷藩)	1

福井県(越前)	越前市(越前府中)、大野市(大野藩)、小浜市(小浜藩)、坂井市(丸岡藩)、敦賀市(敦賀藩)	5
滋賀県(近江)	大津市(膳所藩)、甲賀市(水口藩)、長浜市(朝日山藩、長浜藩)、彦根市(彦根藩)	4
京都府(山城、丹波、丹後)	亀岡市(丹波亀山藩)、京都市(伏見藩、淀藩)、宮津市(宮津藩)	3
奈良県(大和)	葛城市(大和新庄藩)、御所市(櫛羅藩)、大和郡山市(郡山藩)、高市郡高取町(高取藩)	4
大阪府(和泉、摂津、河内)	和泉市(伯太藩)、大阪市(大坂藩)、河内長野市(西代藩)、高槻市(高槻藩)、富田林市(富田林藩)、松原市(丹南藩)	6
和歌山県(紀伊)	新宮市(紀州藩新宮)、田辺市(紀州藩田辺)	2
兵庫県(播磨、摂津、丹波)	明石市(明石藩)、尼崎市(尼崎藩)、丹波篠山市(篠山藩)、宍粟市(山崎藩)、たつの市(龍野藩)、姫路市(姫路藩)	6
岡山県(備中)	岡山市(庭瀬藩)、高梁市(備中松山藩)	2
広島県(備後)	福山市(福山藩)	1
島根県(岩見)	浜田市(浜田藩)	1
大分県(豊前、豊後)	中津市(中津藩)、日田市(日田藩)	2
佐賀県(肥前)	唐津市(唐津藩)	1
長崎県(肥前)	島原市(島原藩)	1
熊本県(肥後)	天草郡(富岡藩)	1
宮崎県(日向)	延岡市(延岡藩)	1

家康公を取り巻く家系図



1. 誕生 / 泰平への祈り

年齢	西暦 (元号)	主な出来事 (※内容については諸説あります。)
	1541 (天文10)	三河刈谷城主 水野忠政の娘 於大は三河岡崎城主 松平八代 広忠に嫁ぎ、乱世を収める子を授かるよう 鳳来寺薬師堂 (新城市) に参詣する。
1	1542 (天文11)	広忠の長男として12月26日、岡崎城内にて誕生。祖父や父と同じく、竹千代と名付けられる。
3	1544 (天文13)	松平家と共に今川方だった水野家が、代替わりで織田方となり父 広忠は母 於大を離縁。祖父 清康の妹 お久に養育される。
6	1547 (天文16)	今川家の人質として駿府に向かう途中、田原城主 戸田康光により尾張の織田信秀 (信長の父) の許に送られる。
8	1549 (天文18)	父 広忠が暗殺される。今川軍が織田方の安城城を攻略、城主の織田信広 (信秀の長男) を捕らえ竹千代と人質交換。竹千代は改めて今川家の人質として駿府へ。

応仁の乱勃発より75年、戦国150年の真ただ中にあたる天文11年(1542)、徳川家康公が岡崎城で誕生しました。この翌年には初めて日本に鉄砲が伝わり、さらに7年後にはキリスト教も伝わります。世は正に秩序乱れる戦国時代、人々の泰平への願いは強く、家康公の誕生の際には、本丸の井戸から金鱗の龍が天に立ち昇る昇龍伝説や、鳳来寺の十二神将のひとりで寅を司る真達羅大将像(寅童子)が忽然と消え、家康公薨去後に元の場所に戻っていたという、家康公「寅童子の生まれ変わり伝説」などが語り継がれました。

2. 駿府 / 学びの人間形成

年齢	西暦 (元号)	主な出来事 (※内容については諸説あります。)
14	1555 (弘治1)	駿府へ赴いた祖母 源応尼 (於大の母 華陽院) の養育と今川家重臣 太原雪斎の薫陶を受け元服。今川義元の一文字を賜り、松平次郎三郎元信を名乗る。
15	1556 (弘治2)	父の墓参で岡崎に。今川の支配に耐え、自分の帰還を待ちわびる家臣らの松平家再興への悲願を知る。
16	1557 (弘治3)	今川の一族 関口義広の娘 (後の築山殿) と結婚。
17	1558 (永禄1)	初陣。織田側の三河寺部城を攻略。祖父 清康の武名にあやかり元信から元康に改名。
18	1559 (永禄2)	長男 信康誕生。竹千代と名付ける。
19	1560 (永禄3)	長女 亀姫誕生。後に奥平信昌に嫁ぐ。桶狭間の合戦。先陣で尾張大高城への兵糧入れを成功させ佐久間盛重が守る丸根砦を攻略するが、大将の今川義元が織田信長に討たれる。

駿府に送られた竹千代は、すくすくと屈託のない元気な少年に成長します。側近の鳥居元忠に対し「百舌鳥を鷹のようにせよ」と無理難題を吹きかけた逸話もそのような様子をよく表しています。また、今川義元の師で高僧で軍師でもあった太原雪斎からの儒教の教えや、兵法などの学びは、家康公の武将としての人間形成に大きな役割を果たしました。

14歳で元服した竹千代は、義元の一文字を与えられ名を「元信」に、更に義元の姪と結婚するなど、義元の思惑や期待の中で戦国武将としての成長を遂げていきます。

3. 立志自立 / 岡崎の10年

年齢	西暦 (元号)	主な出来事 (※内容については諸説あります。)
19	1560 (永禄3)	今川軍が桶狭間で敗れ岡崎 大樹寺に退却し住職の登誉上人に諭され立志。 戦国乱世の収束と泰平社会の構築を目指す。
21	1562 (永禄5)	織田信長と対等の軍事同盟 (清洲同盟) を結ぶ。
22	1563 (永禄6)	元康から家康に改名。三河一向一揆が勃発、家臣団が二分される争いになるも翌年、和議。
24	1565 (永禄8)	三河三奉行を置き、民政の充実を図る
25	1566 (永禄9)	三河一国を平定、朝廷から従五位下 三河守に任じられ、先祖の新田世良田氏から連なる徳川復姓を許され、徳川家康誕生。
26	1567 (永禄10)	長男 信康が織田信長の娘 徳姫と結婚。
27	1568 (永禄11)	甲斐の武田信玄の駿河侵攻に合わせ、今川領の遠江に侵攻。
28	1569 (永禄12)	今川氏真が降伏、三河・遠江の二ヶ国を領有。

桶狭間の合戦で今川義元が織田信長に敗れると、元康は松平家の菩提寺 大樹寺へ入り先祖の墓前で切腹しようとしています。その時に住職の登誉上人から戦国武将として戦う意味を説かれ、「厭離穢土 欣求浄土」の言葉を授けられました。元康 19 歳、平和への志を立てたのです。

岡崎城主となった元康は、伝説の源氏の棟梁 源義家より一字を受け、「家康」と改名。三河一向一揆の危機を乗り越え、祖父清康以来の念願でもあった三河統一を成し遂げました。永禄 9 年 (1566)、25 歳、勅許を得た家康公は、松平から「徳川」に改姓、戦国大名「徳川家康」の誕生です。

4. 浜松 / 艱難辛苦と躍進

年齢	西暦 (元号)	主な出来事 (※内容については諸説あります。)
29	1570 (元亀1)	岡崎城を信康に譲り、遠江 浜松城に居城を移す。 近江 姉川の戦いで、織田・徳川連合軍が浅井・朝倉連合軍を破る。
31	1572 (元亀3)	「三方ヶ原の戦い」で武田信玄に惨敗。短慮を反省「しかみ像」を描かせる。※翌年、陣中で武田信玄病没。
34	1575 (天正3)	織田・徳川連合軍が三河 長篠・設楽原の合戦で武田勝頼に大勝。
38	1579 (天正7)	信長に武田方への内通を疑われ、長男 信康、妻 築山殿 自害。 側室 西郷の局が三男 秀忠を出産。
41	1582 (天正10)	武田氏滅亡。信長より駿河を与えられ3ヶ国の大名に。 本能寺の変で信長死去。堺 (大阪府) より「伊賀越え」で岡崎に帰還。 武田遺領の甲斐・信濃を攻略 (天正壬午の乱) 五ヶ国大名となる。

戦国大名として自立を遂げた家康公は、遠江に進出し、居城を岡崎から浜松に移しましたが、これ以降、戦国最強と謳われた武田家との、10 年に及ぶ苦しい戦いが始まりました。特に三方ヶ原の合戦では、家臣の諫言を聞かず大敗したことで、自らの戒めとして「しかみ像」を描かせました。

長篠の勝利も東の間、岡崎に置いた長男の信康と正室の築山殿を失うなど、家康公にとり厳しい試練が続きます。そして信長が明智光秀の謀反により本能寺で討たれると、泉州堺にいた家康公一行は苦難の伊賀越えを断行し、無事、岡崎に帰ることができました。

5. 雌伏 / 天下人 秀吉の下で

年齢	西暦 (元号)	主な出来事 (※内容については諸説あります。)
43	1584 (天正 12)	小牧・長久手で羽柴秀吉と合戦。長久手で羽柴勢を破る。和睦の証に二男の於義丸 (後の秀康) を秀吉に差し出す。
45	1586 (天正 14)	関白となり豊臣姓を賜った秀吉の妹 朝日姫を継室に迎える。秀吉の母 大政所が岡崎に下り遂に家康公上洛、秀吉に臣従する。 五ヶ国経営のため、浜松城より駿府城に居城を移す。
49	1590 (天正 18)	秀吉の小田原攻めに出陣、北条氏降伏。 北条氏の領国であった関東に国替え (江戸討ち入り)、8月1日 (八朔) 江戸城に入城する。
51	1592 (文禄 1)	朝鮮出兵 (文禄の役)。家康公、肥前 名護屋城に滞陣。
52	1593 (文禄 2)	儒学者の藤原惺窩から「貞観政要」を受講、治世を学ぶ。
55	1596 (慶長 1)	山科言経から「吾妻鏡」の講義を受け武家政治を学ぶ。 正二位 内大臣 (内府) 叙任。
56	1597 (慶長 2)	再度の朝鮮出兵 (慶長の役)。家康公は京都伏見滞在。

信長の後継者として台頭した秀吉は、家康公と「小牧・長久手の戦い」で直接対決しました。家康公は信長の遺児である二男 信雄と連合しての戦いでしたが、信雄の単独講和により和睦します。この後、家康公は秀吉の懐柔策により義兄弟となり臣従を余儀なくされますが、大きな合戦を行うこともなくなり徳川の力を蓄えることとなります。

家康公の五ヶ国 (三河・遠江・駿河・甲斐・信濃) 経営と、北条氏滅亡後に移封された関東の経営は、後の泰平国家の建設に向けての大きな試金石となったのです。

6. 関ヶ原 / 決断の時

年齢	西暦 (元号)	主な出来事 (※内容については諸説あります。)
57	1598 (慶長 3)	秀吉死去 (享年 63 歳)。朝鮮からの即時撤兵を命ずる。
58	1599 (慶長 4)	京都 伏見で日本初の本格的な木版活字出版 (伏見版) 開始。
59	1600 (慶長 5)	オランダ船リーフデ号が九州豊後に漂着、ウィリアム アダムスとヤン・ヨーステンを外交顧問として召し抱える。 上洛に応じない会津の上杉景勝征伐 (会津征伐) に赴く途中、反家康派の石田三成らが挙兵し、鳥居元忠らが守る伏見城陥落。 小山 (栃木県) 会議で福島正則ら豊臣恩顧の大名が味方となる。 関ヶ原の合戦 (岐阜県)。三成らの西軍に勝利する。 三男 秀忠率いる徳川本隊は上田城で真田昌幸に足止めされ遅参。
60	1601 (慶長 6)	五街道整備 (宿駅と伝馬制度、一里塚の設置等) で流通円滑化。

秀吉の死後、内大臣 (内府) に任じられていた家康公は、五大老筆頭として豊臣政権の運営を行います。しかし、これを快く思わない石田三成ら奉行衆との対立が浮き彫りになり、一度は平和になったはずの社会に再び暗雲が立ち込め始めました。このような中でも家康公は国産貨幣の鑄造に着手したり、木版による出版を行うなど、脱・戦国の新しい時代に向けた政策を進めていました。しかし、豊臣政権の存続に固執する三成らによって、家康公排除の動きが活発になり、遂に天下分け目の戦いと称される「関ヶ原の合戦」が引き起こされました。

7. 將軍宣下 / 平和社会への布石

年齢	西暦 (元号)	主な出来事 (※内容については諸説あります。)
62	1603 (慶長 8)	伏見城にて後陽成天皇より征夷大將軍に任じられ江戸に幕府を開く。 孫娘 千姫を大坂城の秀頼 (秀吉の遺児) に嫁がせる。
63	1604 (慶長 9)	糸割符法を定め、貿易を推進。後の三代將軍 家光誕生。
64	1605 (慶長 10)	伏見城で朝鮮使節と会見し、朝鮮出兵 (文禄・慶長の役) で関係が悪化していた朝鮮と善隣友好の和議を結ぶ。 藤原惺窩の弟子の林 羅山 (儒者・朱子学者) を登用する。 將軍職を2年で秀忠に譲る。將軍職は徳川家の世襲であることを示し、世の安定を図る。
66	1607 (慶長 12)	駿府城に移り、大御所政治開始。 初めての朝鮮通信使が来日。 臨濟宗の僧 金地院崇伝と林 羅山に命じ、日本初の銅活字による出版 (駿河版) を開始、文治国家を目指す。

関ヶ原の合戦で勝利を得た家康公は、慶長 8 年 (1603)、征夷大將軍の宣下を受けると、平和社会建設のための諸施策を開始します。

二年後には朝鮮出兵で関係が断絶されていた朝鮮国の使節・松雲大師と会談、閉塞的な外交関係を打破し、さらに東南アジアに向けても広く貿易を推進しました。さらに新しい時代の武士のあり方を求めて朱子学を奨励し、文治国家の基盤を整え、秀忠に將軍職を譲ると、慶長 12 年 (1607)、江戸城より駿府城に移ります。

幕府政治は江戸の將軍に任せ、自身は「大御所」として平和社会構築のプランを描いていったのです。

8. 元和偃武 / 悲願果てなく

年齢	西暦 (元号)	主な出来事 (※内容については諸説あります。)
70	1611 (慶長 16)	二条城で秀頼と対面、両家の衝突を避け、関係改善を図る。
73	1614 (慶長 19)	方広寺鐘銘事件。幕府に対抗する豊臣家との「大坂冬の陣」勃発。
74	1615 (慶長 20)	「大坂夏の陣」で秀頼と母 淀殿自害、豊臣家滅亡。
	1615 (元和 1)	年号を元和に改め、武を収め平和の始まりを意味する「元和偃武」を宣言する。 「武家諸法度」「禁中並公家諸法度」「一国一城令」制定。
75	1616 (元和 2)	4月 17 日、駿府城で薨去。遺言により久能山に埋葬され、葬儀は増上寺で、位牌は大樹寺に置かれる。
	1617 (元和 3)	天海僧正の働きかけにより朝廷より東照大権現の神号を受ける。日光に改葬、日本の恒久平和の守り神となる。

「これが最後の戦い」と心を決した家康公は、74 歳という高齢を押し「大坂の陣」に挑み、豊臣氏は滅びます。すべての戦いの火種を消し去り、遂に若き日の志を成し遂げた家康公は年号を元和と改め、ここに「元和偃武」を宣言します。応仁の乱からおよそ 150 年、戦国時代の終焉を見届けた家康公は、翌年、駿府で息を引き取りました。

一周忌の後、東照大権現の神号が贈られた家康公は、遺言どおり日光に神として祀られました。家康公は死してなお、今も国家の平和を見守り続けているのです。

●結び

矢作川^{やはぎ}流域は、三河武士たちのふるさとです。

戦国終盤、三河武士たちはこの山河から天下の「土」^{きむらい}へ向かい、泰平国家の礎^{いしづえ}となってゆきました。

およそ700年、武家がこの国を治めた日本。徳川政権に至って「この国のカタチ」^{ととの}を整えてゆくとき、三河の「土」^{つち}から天下の「土」^{きむらい}へ、磨き、高まり、深まり、成長、進化して、泰平国家の礎となりました。

ここは足利源氏の地盤。室町幕府の礎となったところ。その山河を這^はい上がってきたのは新田源氏の系譜^{けいふ}、松平氏。累代^{るいだい}を重ね、三河武士たちの棟梁となって戦国乱世を征してゆきました。

目指したものは泰平。

戦争のない国へ、戦い、学び、耐え、学び、・・・

その時、「家臣こそ、わが宝」という家康公と三河武士たちは、互いに信じ、互いに響き、ともに成長して「人間・徳川家康公」を創り、その三河武士たちは、代を重ね、泰平の世の真の「サムライ」に成長し、国を治めました。

江戸が終わり、武士は消滅しましたが、日本人の心の奥底に脈々と息づく誇りは、「サムライ」の心。日本と日本人を創りました。

●次へ

歴史に学んで、265年の江戸泰平を築きました。

江戸が終わり、明治から150年、その真ん中に国家と民族の危機を体験し、戦後74年の今があります。

西欧の、軍事に翻弄^{ほんろう}された戦前、経済に翻弄されてきた戦後があります。

家康公の、重き荷を負い遠き道をゆき、辿^{たど}り着いた境地。

それは、誰のものでもない、「天下は天下の天下なり」。

家康公と三河武士たちが、矢作の支流細流から大河に出て、戦い生き抜き、掴^{つか}み、遺^{のこ}した思想とともに江戸の泰平が開きました。

教養と文化の徳川政権が成り、津々浦々の地方自治がありました。

戦国争乱の、まだ、武家政権が未熟なころ。「信」なく、公も武も、互いに妬^{ねた}み、陰謀^{いんぼう}、寝返りなど人間の性^{さが}をむき出しの中を、武士は武力で収拾し、治めていました。

乱世、武士が入り乱れる三河の地だから、正邪^{せいじゃ}を学習し、家康公は学び、三河武士たちは学び、泰平社会の武士のカタチ、「サムライ」を創りました。

世界に目を向ければ、未だ混沌^{こんどん}。

歴史に学び知恵を深めてゆくため、この検定は続きます。

私たちは「新・家康公検定」を応援しています。

愛知県信用保証協会	武田機工（株）
アクサ生命保険（株）	タニザワフーズ（株）
いちよし証券（株）岡崎支店	（株）ツツイエンターテイメント
（株）太田商店	（株）東海愛知新聞社
太田油脂（株）	東海光学（株）
（一社）岡崎市観光協会	東邦ガス（株）三河支社
岡崎信用金庫	（株）トーエネック岡崎支店
岡崎通運（株）	（株）中根組
おかしん信用保証（株）	服部工業（株）
おかしんリース（株）	フタバ産業（株）
岡陸タクシー（株）	ホリデー車検岡崎中央ただうちモータース
小原建設（株）	NPO祭だワッショイ
（有）オプト・ヨシカワヤ	（株）みずほ銀行岡崎支店
（株）享成自動車学校	三菱自動車工業（株）岡崎製作所
（株）太陽社	リコーエレメックス（株）
（株）竹内文具店	

（協賛事業所名一覧 50音順）

「新・家康公検定」副読本

わがふるさとは、三河

「家康公と三河武士たち」

発行日 令和元年（2019）8月20日
編集 おかざき塾
協力 岡崎市・岡崎信用金庫・幸田町
発行者 公益財団法人徳川記念財団
岡崎商工会議所
